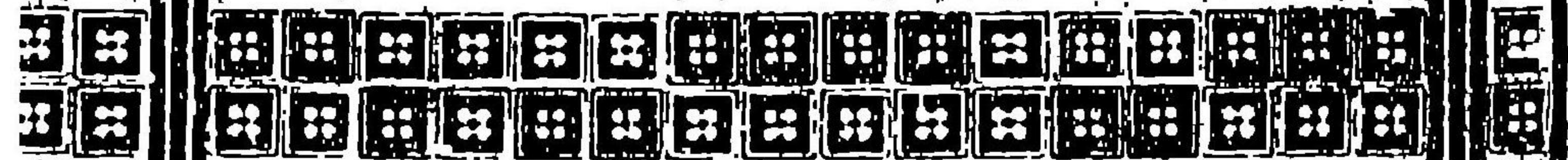
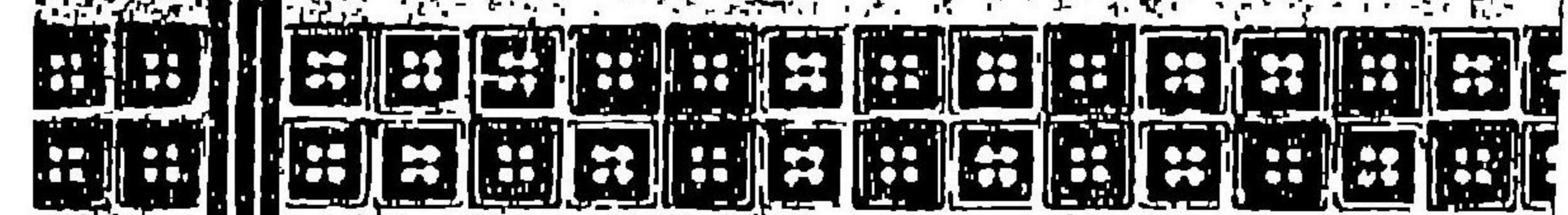


2-171

94
313

日露海戰談



94-313



次

有馬大佐の海戦談

遠矢大尉の海戦談

本田少佐と遠江丸

小笠原中佐の海戦談

嗚呼白石少佐

明治
27 9 22
内交

一

三一

六六

九六

一一九

日露海戦談

○有馬大佐の海戦談

小笠原君から何か艦隊の事をお話するやうにとの事でございますが、お話いたしますについては、少しばかり順序を立て、お話したいと思ひましたところが、實は先刻まで猶豫の出来ない用がございまして、お話いたします事に順序も立ってございせんけれども、お約束いたしました事でございますからお話いたします。皆様に向つて、どう云ふ事柄をお話いたしましたならば御満足をおませうか、私は分りませんが、しかし諸君は今日迄の戦闘の状況は、最早聞くことをお望みになるまいかと思ひます。それはなぜか

なれば、モウ過去の戦闘状況の如きは畢竟娯樂で、寧ろ艦隊の状況がどうであらうかと云ふやうな、尙ほ今後の戦局に大關係あるものの如きものは、國民が熱心に之を聞くことを希望するだらうと私は信じて居ります。しかし諸君の中には、私が閉塞隊の一指揮官として参りましたから、何か閉塞に關する話を聞かうと云ふことを御希望になる方が多いてになるかも知れません。けれども、私はさう云ふ事柄が大に同情を以て歓迎せらるゝと云ふことは聊か遺憾とするところてあります。殊に閉塞隊の者を決死隊など、唱へて居るのは海軍に聊か侮辱を與へらるゝやうな心地がいたしまして、私は甚だ悲むところてあります。ナゼと云ふのに、我々軍人が大命を奉じて一度戦場に赴きましたならば、いづれも決死の志を持たぬ者は一人もありません。唯彼等の唯一の目的と云ふものは、各自分の職務を

完全に遂行して、自分の乗つて居る艦艇の戦闘力を充分に發揮せしめやうと云ふにあるだらうと思ふ。さう云ふ譯でありますから、素より各自の勇名を世に紹介せらるゝ場合は甚だ少なくありますけれども、畢竟今日に至るまで、此艦隊の戦闘力が非常に健全であつて、一も重大なる戦闘力を減ずることなく、さうして今日まで數回の勝利を博したと云ふことは、全く乗員が皆自分の職務を完全に遂行した結果であります。此勝利の名譽は彼等全體に於て受くべきものであつて、其功績と云ふものは、決して閉塞隊員のそれに比して遜色がなからうかと思ひます。それで私はこれから艦隊の現状がどうであらうかと云ふことをお話したいと思ひます。併し艦隊の現状と申しますれば、誠に乾燥無味に過ぎますから、今日まで數回の戦闘がございました、其戦闘の大體のお話をして、それに附け加へて

艦隊の現状をお話いたしませう。

さて艦隊の現状をお話する前に、開戦以前即ち二月六日以前に遡つて、少し艦隊の状況がどうであつたかと云ふことを、お話して置く必要があるだらうと思ひます。それはそれまでの艦隊に於ける訓練が、大に此度の戦争と聯關するところがありますから、其事を一應お話しておきます。

去年の末に、日露の危機が段々切迫いたして参つた際に、我が艦隊の訓練はそれ迄に非常の進歩をいたして居りました。殊に砲科の指揮、即ち大砲を打つ事に關する指揮であります、それと驅逐艦の水雷、魚形水雷の發射、此二ツの事は著しい進歩をいたしました。其一例を擧げて申しましたならば、通常軍艦に於て、訓練のために大砲射撃に用ふる火薬は、大砲の生命を長く保つのと、一は經費の點

から、戦闘に用ふる火薬の量よりも減じて、それを使用して居りました。火薬を減ずる結果は、運動が大變違つて参りました、従つて命中が悪いやうな譯になつて居るのでございますが、此危機切迫の以前、前後二回戦闘に使用する善良の火薬をもつて、大砲射撃を行ひました。ところが其以前からして屢々訓練を加へて居りました結果、第一回に非常の好成績を現はしたです。それから第二回にも更に好い成績を現はしました。或る艦の如きは、殆ど百發百中と申すやうな有様でありました。其上に下瀬彈の非常に猛烈なる有様を實驗しましてからは、兵士は其自分が指揮さるところの艦長及び自己の分隊長を信じ、又自分の腕前を信ずると云ふことになりました。大變此際に著しい長足の進歩をしたのであります。其場合に一方に於ては、兵器、即ち自分の軍艦に備へてある兵器の事について、色

有馬大佐の海戦談

六

々な攻究を遂げまして、色々な検査又は研究をいたしました其結果、自分の持つて居る兵器は、實に唯一の兵器である、實に良い兵器である、と云うて、兵器をも信ずるに至りました。それですべてが我々の艦隊の戦闘力は、軍艦の機械に於ても、又自己の手腕に於ても、何れの艦隊に對して戦うても餘りあると云ふことを信ずるやうになりました。かう云ふ具合が二月六日以前の有様であつたのであります。二月六日に大命を奉じて艦隊が佐世保を出發いたします際には、私共は必ず敵の艦隊と海洋に於て一大海戦をするものと信じて居りました。それはナゼと申しまするに、敵の艦隊が旅順港外に出て居ると云ふ情報を得ました。其出て居る軍艦を見ますのに、戦闘艦隊の外に機械水雷を沈置いたしますために設けたアムール、エニセーと云ふ軍艦を伴つて居る、それに運送船を伴つて居りました。それ

らを伴つて居る所から判断いたしますと、敵は必ず攻勢を取るものとしきや判断が出来ない。然るに我が艦隊は、仁川、旅順に於て、敵に第一撃を加へて大變な成功を得ました。それは東郷司令長官の畫策誠に宜しきを得ましたのと、此危機切迫の際に軍事外交の當局者が、誠に思慮深く協同一致の結果に外ならんことと考へます。殊に私が考へまするのは、遞信省の當局者が、全力を奮つて作戦の一の神經たる通信の事に非常に盡力せられましたのは、確かに此成功を助けたことと信ずる。

旅順、仁川の戦闘が終りましたから後に、或地點に歸りました。其地點に於て行ふたことは何かと云ふと、石炭と水の補充、それから敵彈の爲めに少しく蒙りました損害の修理でありました。軍艦は御承知の通り、石炭と眞水がなくては一日も存在することが出来ませ

ん。それで石炭船或は工作船は、既に艦隊の出ましたあとで、或地點に於て命令を待つて居ましたが、昨日まで従容として彈丸雨注の下にあつた士官も下士卒も、眞つ黒になつて石炭を積み込み、眞水を積むことに従事いたしました。又工作船の匠工は、今まで待構へて居りました鐵槌を振り、多少損傷を受けて居つた艦艇の修理を僅か二三時間の内に完成いたしました。再び何時でも敵に應ずることの出来る準備が出来ました。今日に至るまで、我がこの艦隊に向つて石炭、眞水、糧食を供給致しますのは、誠に澤山な額でありましたが、それには少しも遺憾なく供給をし得まして、聊かの不足を感ずるやうな事がありません。又船に多少の損傷があつても、極めて短時日の間に、戦地に於て修理する事が出来ましたので、まだ敵彈の爲めに蒙つた損害を直す爲めに、佐世保へ水雷艇の一つだも送つ

日 露 海 戦 談

た事はありません。皆戦地に於て、數日の間に其修理を終るだけの設備が出来て居ります。かくの如く海上の任務が誠に完全に出来て居りますのは、戦時編制が誠に完全に計畫せられてあるためでございます。それは中央に於ける當局者が鉛筆を振つて數理的組織的に能く之を計畫したるため、我々が策源地を去る數百里の地にあつても、尙ほ策源地に於けるが如き供給を得た譯であります。

此旅順、仁川の戦に於きましては、新聞紙に屢々記載せられてある通り、我が兵士の士氣は誠に盛んでありまして、東郷司令長官の報告にある如く恰も演習に於けるやうな有様でありました。士氣は益々旺盛でしかも舉動は愈々沈着だと云ふことがありましたが、それは充分適切な辭であらうと存じます。其後今日に至るまで、士氣の點に於ては以前と少しも變つた事はございません。これは誠に私が

日 露 海 戦 談

愉快に思ひます。

次に大なる行動は、第四驅逐隊が大風雪に拘はらず、危険を冒し、暗に乗じて、旅順港の敵艦を襲撃いたしましたのと、それから第一回の旅順閉塞であります。驅逐艦の襲撃をうけたのはレトウキザンとも申します、又ポヤリンを撃沈したとも云ひます、けれどもまだ正確の事はわかりません。又旅順の閉塞事業は、實質に於てはトウく成功いたしませんでしたが、唯だ我軍の士氣をして非常に興奮せしめた、又敵の彈丸と云ふものはナカく容易に當るものでないと云ふことを知らしめた、且敵に我軍の勇氣を示したのと、それらの間接の利益を得た外は、別に閉塞と云ふ目的を達する事が出来ませんでした。

其次に記憶すべき行動は、三月十日にありました間接射撃であり、す、此間接射撃の事は、數回新聞紙上にも現はれまして、諸君は御承知で居らつしやいませうから、別に申しませんが、唯この三月十日の間接射撃の時は、敵の砲臺の射界外に唯一の非常に良い位置を見しました。其唯一の良位置を発見しまして、其所から十二吋砲を以て戦闘艦六隻から數時間の間接射撃を行いました。しかし間接射撃は山を距て、港の内へ撃ち込むのでありますから、其時第三戦隊を看的として置いてありましたけれども、實際に何程敵の戦闘力を破壊したか、それは不分明であります。唯新聞紙上に現はれた位しか分つて居りません、しかし敵の戦闘力をドノ位破壊したかは能く分りませんが、兎に角敵の士氣を沮喪せしめたことは非常なものであらうと私は信ずる。其間接射撃の時に、十二吋の彈丸が、高い老鐵山を越して落ちる時の勢と云ふものは、實に凄まじい音で、恰も

日 露 海 戦 談

百雷の一時に落つるやうでありました。殊に爆發する時の勢と云ふものは、誠に猛烈な勢でございました。それで敵から見ますと、港の内へ錨を入れてジツとして居る所へもつて来て、さう云ふ勢で猛烈に爆發するのを見たならば、非常に士氣の沮喪すると云ふことは明かであらうと思ひます。畢竟、此間接射撃は非常な戦闘力を破壊したと云ふことは分りませんが、四月十三日に、マカロフと共に旗艦ペトロバウロスクを沈没せしめ、又ボヘータに損傷を與へたと云ふことは、此間接射撃が一の原因を爲したものと私は斷言いたします。

其次の行動は第二次旅順港口閉塞であります。此第二次旅順口閉塞も亦充分に成功を遂げません、尙ほ大艦隊の能く出入いたしましたものは誠に遺憾であります。併し彈丸雨注の下にあつて、四隻共悉く港の口まで達したのは、他日何事をか生み出すことがあると私は信じます。

日 露 海 戦 談

第二次港口閉塞に續いての大行動は、四月十三日の旗艦ペトロバウロスクの沈没であります。其戦況の大要は、新聞紙上に出ましたか知りませんが、私は現に沈没の所を見て居りましたから、ここで委しくお話しませう。(此時大佐は旅順口の略圖を描きて示す) 此時の行動は、機械水雷を此旅順港へ入れて、それから翌朝第三戦隊が此港口を偵察に行つて、敵が出て來たならば本隊の方へ誘致すると云ふ策でありました。デ本隊は東方の沖の方へいつて、此處から段々進んで行く譯であります。此朝第二驅逐隊は敵の驅逐艦四隻に逢ひまして、之を數分の間に撃沈いたしました。今まで驅逐艦は屢々戦闘をいたしました。常に敵の驅逐艦が沈没をして、我が驅逐艦

は随分多数の弾丸を受けたことがありますけれども、一隻も沈没したことはございません。又動けないと云ふ位の打撃を受けたこともない。多くの場合は、此方こちらの方が優勢でありましたけれども、兎に角駆逐艦は防禦のない船でありますから、若し敵の弾丸が一発でもあたれば動けないことは有勝ちなのに、依然我が駆逐隊は沈没は愚か、動けないやうになつたのすら一隻もない。是れは敵の弾丸は日本のに較べると爆發力が弱い、日本の弾丸は敵のそれに比して爆發力が強いと云ふことが一の原因となつて居るだらうと思ふ。勿論日本の駆逐艦の射術も敵よりは優つて居るだらうと思ひますけれども、敵も我が駆逐艦に數發の弾丸を命中せしめて居る、しかし其爆發力を見るに我が弾丸の爆發力とは大に違つて居ります、これは確かに下瀬さんの一の功と信ずる。

日露海戦談

こゝで敵の主艦が殆ど沈没しかけた時に、まだ敵の兵が四名ばかり残つて居つたさうで、それを救助しやうと思つて居るうちに、バヤーンが非常の速力を以て進んで來ましたから、終に残つた兵を救助せずして、南の方即ち第三戦隊の居る方へ避けたのです。其前に敵の駆逐艦が一隻、老鐵山の南の方を沿うて、旅順の方へはいつて行くのを認めて、それに少し砲撃を交へたさうですが、固より遠距離の所でありましたから、そのまゝ彼れは港口へはいつてしまつた。第三戦隊がこれへ進んで参りますと、バヤーンが非常の速力をもつて出て來て、凡そ八千米突位まで近寄つて來て第三戦隊を攻撃したさうです。此第三戦隊は數隻の艦でありましたが、それに對してバヤーンが突進して來たのは、聊かバヤーンの艦長は勇氣のある人と思ふ。しかし八千米突位の處で僅に弾丸を交換して直ぐに向ふから

日露海戦談

戦を避けましたから、第三戦隊はそれを追かけるとバヤーンは港口の方へ向つて行つてしまつた。第三戦隊はやはり此前を數回運動して居りますうちに、敵の本隊が港口へ出て來ました。其時は大變靄のある時で、其靄の中から急に第三戦隊を目がけて全速力を以て突進して來た、第三戦隊はやはり八千米突位まで近寄つて砲戦を交へつゝ第一戦隊の方へ敵を誘致して來ました。其時に第三戦隊から『我れ敵の主力と交戦中』と云ふ無線電信がありましたから、第一戦隊は其方へ進んで參りました、さうしますと敵も何かやつて居りました、恐らくは黄金山から我が艦隊を認めて外に居る自分の艦隊に知らしたのかと思ひます。我々はまだ其時は敵を見る事が出来なかつたけれども、黄金山からは高いものですから我々を能く認めたものであらう。本隊が段々近寄つて參りますと、向ふは丁度隊列

日 露 海 戦 談

を整へて居るやうでありました。第三戦隊と戦つた時には、敵は本當の陣形を整つて居らなかつたのであると思ふ。ナゼなれば港口の口を出るには狭うございますから、出よい艦から段々出て來て列を整へないで突貫して來たけれども、第一戦隊が現はれて來たので其間に列を整へたのであらうと思ふ、非常にこゝで混雜して居りました。殆ど一萬八千米突位迄に敵に近寄りました時に、敵は二列の横列を整へて居りました、しかし殆ど十里程距つて居りますから、果してどう云ふ陣形であつたか詳しくは分りませんが、凡そかう云ふ形ち(圖を描きて)で港の口へズン／＼はいつて行きました。それから、敵は例に依つて砲臺の援護の下へはいりました、さてイツモの通りマカロフの流でコチラの方へやつて來ると思ひましたから、右の方向へ我々は敵とバラレルに進んで行つた、スルとかねて我々が

日 露 海 戦 談

敵を引掛けやうとして入れてある機械水雷に掛りさうになる、總て我艦隊の者はモウ旨く掛るであらうと皆な望遠鏡で見て居た、私は最初から詳しい事は見て居りませんでした、中に最も能く見た人がありました、其人の云つた事を話いたします。最初モウ掛るであらうと見て居つた時に、フォールブリッチ即ち前艦橋の所まで水が非常に高く膨れて持上つた、ソラ掛つたと皆なが喜んで居りました、ところがさうしますると間もなく非常の爆發を起しました。其煙の高さと云ふものは非常なものでありました。私は其爆發した時見たのでありますが、非常に高く煙が吹上つて上て廻る、ヒドイ有様でありました。爆發すると直ぐに向ふのマストが右の方へ倒れた、四十五度位までは緩くり倒れて、四十五度位から急にズツと倒れて見えなくなつた。其倒れる時でありましたか、或は倒れた後であら

日 露 海 戦 談

うか、ソコラは能くわかりませんが、引續いて水か蒸氣であるか非常に白いものが又高く噴出したです、それと共に非常な火を噴き出した、其噴き出した火は實に凄まじいものでありました。察しまするに最初水の膨れたと云ふのは機械水雷が爆發したので、それから非常な爆發を起したと云ふのは、恐らく前部の火薬庫が爆發したのであらうと思ふ。それから白い色の物を噴出したのは、ボイラーが破裂して水の中へはいつてしまつたものですから、其蒸気が噴き出すと同時に水を噴き上げて、火は汽關の中にありました石炭を非常に噴き出したためにさう云ふ火が遠くから見えたんだらうと思ひます。それで此沈没は終りましたが、其ペトロバウロスクの煙が晴れますと其後に、又一隻の甲鐵艦が現はれて参りました。速力は十哩か八哩位で歩いて居つたと思ふ、又艦と艦の距離は四百米突

日 露 海 戦 談

としても、第二の艦が艦の危険を見て止めやうとしても止められませんが、自分の隋力で此處まで往って、やはり機械水雷の上に掛って遣られたンてないかと思ひます。それは敵の報告に依りますとポベードが水雷に掛つたと申しますから、これがポベードであらうと思ふ。しかし何等の變つた様子は、我々は見て居りませんけれども、兎に角機械水雷の第二の所に來て居りましたから、これもやられたらうと思ふ。

それで又艦隊は外に作業がありましたから、且つイツモ敵の驅逐艦を防ぐ爲めに旅順灣の口は早く去るのでありますから、本隊の方は引上て或る一隊を偵察の爲めに残して置きました。ところが敵の艦隊が港内にはいりましたのは殆ど一時頃だつたさうです。此機械水雷の爆發したのが十時三十二分でありまして、敵の總ての艦隊が港

内にはいつてしまつたのは一時頃であつたさうです。之に依て見ますと敵が港内にはいるのには非常の困難をしたものであらうと思ふ。それから敵が段々に港の口へはいつて往きます時でした、敵の諸艦は艦から近い距離の水面をば非常に撃つたのです、どう云ふ理由で撃つたかわかりませんが、想像して見れば、或は機械水雷と云ふことは知らなかつた、突然日本の潜航水雷艇が此邊まで來て旗艦をやつたのではなからうかと思つて、ごく咄嗟の間に一の策を案じて、兎に角水面を撃ちさへすれば、潜航水雷艇は恐れて逃げるだらうと云ふところから、斯の如く水面を撃つたんだらうと思ふ。前に三月十日の間接射撃は、此マカロフと共にベトロパウロスクを沈没せしめた一の原因であると斷言しましたが、其理由をこゝで申し上げます。敵の艦隊は西港に繋いで居つたのです、他の方にも居りまし

たけれども、常に一番多く繋いで居つたのは西港であります。間接射撃で老鐵山の下方から西港或は東港の船渠へ撃込むと、前にお話いたしました通り非常に凄まじい爆発をやりますから、甲板の上にも十二吋弾が爆発しましたならば、殆ど戦闘艦一隻は用ひられざるほどのものになるから、とても此處に居つてはたまりません。萬一士氣を損じてはならん、又黄金山の下まで出て來なければ砲臺からも日本の艦隊を撃てぬ。港内に居れば日本の間接射撃で益々士氣を沮喪せしむる。港外に出れば萬一日本の艦隊が迫つて來ても砲臺をもつて防ぐことが出来るから、大變利益であると信じたのであらうと思ふ。デ日本の艦隊が現はれると此内に居らぬ、彼等の運動する所はイツも同してある、マカロフの手は變つた事はない、中飛車はイツモ中飛車で來る、コチラはそれを承知して居るから必ず此

處へ機械水雷を布設して置けば彼れは掛かるだらうと云ふ考でございまして、機械水雷を或る所へ入れた、ところが幸にそれが効を奏して、激烈なる打撃を與へたのであります。それから敵は今まで常に港口よりも老鐵山の方面にイツ、大連灣の附近へイツ、驅逐艦を置きました我軍も、此驅逐艦を相手に随分行動したことがありましたけれども、まだ敵艦の多くを撃沈することは出来ない、僅かの驅逐艦を沈没せしめた譯であります、しかしながら、數回の戦争によつて敵の驅逐艦は非常に少なくなつて居るだらうと思ふ。我が打撃を受けて充分の修理をしなければ容易に使用することは出来ない、現在使用するものは大變減つたと云ふことは信じて居るのである。しかし凡そドレ程減つて居るかと云ふことは判断は出来ない。今申上げました外に、驅逐艦の戦闘は數回ありましたが、驅逐艦の士卒は誠

に適當の人を得て居るものですから、其他の水雷攻撃に於ても、其他の砲戦に於ても、頗る好結果を占めて居る。敵の驅逐艦などの操縦は、私の見ましたのでは餘り熟練して居るとは思へない。我驅逐艦は充分慣れて居りますから、暗夜の時に十數隻の驅逐艦が旅順港口に現はれて縦横の運動を致しても、味方打ちをするやうな事は嘗てない。しかし敵は屢々味方打ちをした事はあるだらうと思ひます。其上敵は燈火を全く消して船を操縦すると云ふことに、まだ餘り慣れて居らぬやうです。現に第一回閉塞の際に、老鐵山について参りましたが、此近傍から二隻の驅逐艦が出て來まして、直ぐ私の乗つて居る船の前を通つて、又右に往つて又私の方へ進んで來て、今度は東の方へ向けて参りましたが、非常に早い速力で進みました。其時には無燈かと云ふと決してさうではない、或は白、或は赤、或

は白青のランプを掲げて居りました。これは何かの信號だらうと思ひますが、さう云ふ燈火を公然と出して運動して居るやうな日本の驅逐艦は決してございません。彼等が燈火がなければ運動が出来ないと云ふのは、畢竟訓練の足りないゆゑであらうと思ふ。我が日本では随分屢々演習をして、其間には色々な不幸の事がありましたけれども、其結果が今日に至つて現はれまして、如何なる暗夜に、數十隻の驅逐艦が運動しても決して差支はない。これは今までの演習の賜であらうと思ふ。

これで大體大きな行動についてお話を一通りいたしました。それから先刻お話致しました通り、艦隊の有様はどうであるかと云ふこと、今後の戦局に就て大變關係を有つて居る艦隊はどう云ふ有様であるかと云ふとを、まだ充分盡してなからうかと思ひます。今ま

て御話いたしましたうちに漏れたとを申しませう。第一兵員の健康である。ヘルス、衛生はどうかと云ふと、非常に佳良であります。新聞紙上でも恐らくは御覽になつたらうと思ひますが、艦隊付の軍醫の報告の如く、衛生は非常に佳良でありますから、此點に就ては充分安心してよからうと思ひます。それから軍艦水雷艇の戦闘力はどうかであるか。これは前にもお話ししました通り、艦艇は非常に健全であると思つて宜しうございます。勿論其中汽關のチューブ、ア、云ふものに漏りが起つて、自然に弱つたと云ふこともありますけれども、それは其チューブを入れかへさへすれば直る、チューブを交換すれば再び健全な者になる。さう云ふ者の外、今日の艦艇に於ては一も戦闘力に影響を及ぼすやうな損傷と云ふものはないのです。これまで損傷がないのみならず、又將來に於ても充分それを使ひ得る

だけの有様であります。總ての消費品、例へば石炭、或は油、或は糧食、さう云ふものゝ供給は實に充分にされて居ります、其設備も非常に完全である。前にもお話ししました通り、數百里距つて居る前進根據地に於て、尙ほ策源地に居ると同じやうに供給の便を得て居るのでございます。糧食の供給が充分であると云ふことが、大に兵の健康上にも關係を及ぼして居るだらうと思つて居ります。前にもお話ししました通り、兵員は各自自分の職務を完全に遂行すると云ふことが唯一の目的であります。其理由は艦は御承知の通り皆分業になつて居る、機械を動かす者は機械を動かし、汽關の蒸氣を起す者は汽關の火を焚く、それからして大砲を打つ者は大砲を打ち、大砲に供給する彈丸火薬を火薬庫から揚げる者は揚げる者で職務になつて居る、舵を取る者は舵を取る者で職務になつて居る、信號する者

は信號するのが職務である、又無線電信をやる者は無線電信に従事するのが一つの職務となつて居るのである。是等の者が皆充分に任務を遂行して、始めて一艦が完全に戦闘力を發揮する事が出来るのでありますから、兵員が殊更ら目立つて働きをしたと云ふことがありませんけれども、艦隊が今日まで此位の好結果を得て、未だ各艦が非常の戦闘力を維持して居ると云ふのは、彼等の力に幾分か歸せなくてはならぬと思ふ。さう云ふ具合に、兵員は誠に皆勉強して居るばかりでなく、士氣は益々旺盛であります。決して大きな戦争がないと云つて、士氣が衰へたと云ふやうなことはなく、又勝つたからとて驕るやうなこともありません。今申ました通り、勝つて驕ると云ふやうな氣色がない許りでなく、まだ或人の如きは、我々は今度のやうに容易い勝利は國家百年のために寧ろ喜ぶべきでない、ナ

日 露 海 戦 談

ぜと云ふに我々の子孫があまり容易く勝つと遂に驕る心が生じて、ために他國の乗ずる所となるかも知れないから、寧ろ我々は多少の辛苦艱難を得て、充分の勝利を希望すると云ふて居ります。聊か矯激に過ぐるやうな言ではありますけれども、其内に幾分の眞理があるだらうと思ひます。決して容易く勝つた爲めに驕ると云ふことはなからうと思ひます。又我々は屢々戦勝の時に天佑と云ふことを云つて居ります、しかし東郷司令長官の計畫は常に極く細心なる數理的の研究と、戦術の原則とを當て箝めたるもので、決して自ら助けずして天佑を祈つて居ると云ふ譯ではないのであります。唯其計畫が着々成功して、寧ろ希望以外の好結果を收めたことを我々が天佑と唱へて居るのであります。私は我が國民と共に尙ほ此將來の戦局に對して自ら助けずして天佑を祈るやうなことをせず、どうか充分

日 露 海 戦 談

終局の大勝利を収めんことを希望するのであります。

大體お話いたしますればこれだけのことであります。尙ほ此外にお聞きになりたいことがあれば、まだ時間がありますからゆつくりお話いたします。

(五月二日水交社に於て)

▲決死隊を送る歌 (當日旗艦吹奏)

勇みて進め決死隊	旅順の港を閉塞し
敵の軍艦封鎖して	袋の鼠と爲せよかし
制海權を我れの手に	確に收むる此の一舉
唐の仁川、天津も	豊けき武州と諸共に
我が大君の報國の	堅き心をあらはさば
我が武揚りて世の中に	譽れは高く立ちぬべし
八百萬の神々も	猛き勇士を守るなり
いさをし立よ大丈夫	勇みて進め決死隊

○遠矢大尉の海戦談

私はかう云ふ皆様の居らつしやるところでも話いたしますことは今回が初めてで——生れて初めてでございます、それに元來性質が訥辯とらべんでありますからして、或は事實じじつを顛倒してお話するかも知れませぬから、そのところは篤とくと御諒察ごりやうさつの上お聴取あらんことを希望いたします。

最初に第三回の閉塞隊のことをお話いたします。第三回の閉塞があると云ふことは、艦隊の内では第二回の閉塞が濟すむと直すぐウス々々噂はあつたのです。ところが愈々閉塞隊が編制へんせいされて、ソレを實行すると云ふことを艦隊で知りましたのが、四月中旬でございます。ソレで今の聯合艦隊參謀長は以前初瀬艦長をして居られました、私

は其部下がにあつて分隊長を奉じて居たです、ソレで幾分か私の人と爲りを知られて居つたものですから、第三回の時には及ばずながらも参謀長がお呼びになつて、お前を或る一艘の指揮官として使ふつもりである、ところが閉塞指揮官は十二人も出るのである、さうして又船も多いから、色々準備をするに誰か主任となつてやるものがないければいかぬから、兎に角お前を一艘の指揮官とする以上は、幸ひ根據地こんどちにも居るから、お前が参謀みたやうなものになつて、一ツ此度働いてくれといふ御依頼であつたのであります。ソレで私も悦んでお受をいたしました。さうすると、四月十八日頃は既に準備を整へて、内地から閉塞船が一二艘やつて来る、其翌日また一二艘やつて来る、其翌日また一二艘やつて来る、其翌日また一二艘やつて来ると云ふやうな譯で、漸く閉塞船がやつて参りました。やつて参ります度ごとに、閉塞へいさくに色

日露海戦談

日露海戦談

々の準備をして置けと云ふことでありましたが、固有こいづの乗組の船員が私に一々注意を與へて準備をさせたのであります。其注意は一回二回に往ゆかれました有馬中佐——有馬中佐から篤と色々準備すべきことの御教授を受けて居りますから、それを守つて準備をさせ、且つ自分で氣が注ついて居つたことも船員に注意を與へて、種々の準備をして貰ひました。それで御用船は四月廿八日でスツカリ揃ひました、最後に参りましたのは海軍の元御用船であつた佐倉丸、これが遅れたために、準備も幾らか遅れた模様でありました。御用船はそれで纏まとまりましたが、二十八日までは乗組員もまだ悉くさまつては居りませぬ、しかし大部分はさまりましたが、一々誰がどれに往くと云ふことはまださまつては居りませぬ。それから總指揮官が出来ると云ふことであつた、ドナタであると言ふことは、私は二十日頃

には承知して居つたが、他の人にはまだ艦隊中でも知らせなかつた。それはドナタであると言ふと、このたび鳥海チヤウカイで名譽の戦死をせられた林中佐、即ち今の太佐でございます。それで參謀長から御挨拶を受けました時に、林大佐は實に注意周到で、物を計畫するに迅速に仕事をされる人であるから、お前は能く其林大佐の命を受けて事に當れといふことを、參謀長から御注意があつた。時に私は林大佐には未だ一面識めんしきもなかつたのであります。それで林大佐の早くお出いでにならんことを希望して居りましたところが、林大佐は鳥海艦長の職にあつて、大同江に於て陸軍援護の任につかれて居つたのですから、容易に根據地へ來こられなかつた。ところが二十七日に鳥海は大同江から根據地へ參つた、それで私は其晩直すぐに十二時過ぎ林艦長の所へ往いつて、實は參謀長からお聴取きとりてしたらうが、私はこれこれの命を

受けてこれ／＼の準備をして居りましたからと云ふことを御報告しました。ところが林艦長は非常にお悦びで、こんなに仕事が進んで居れば實に有り難い、早速明日から鳥海艦長の代理が出来ると仰おつしやつたから、私は其晩はお別わかれをして、それから二十八日に二人揃つて旗艦三笠みかさに參つた。さうして三笠から閉塞に乗込む人、それからどの船には誰某たれに往いつて貰もらふといふ配くばり方などをきめて、閉塞船へいさくせんに往いつて見ました所が、各指揮官も或は大同江から選抜されて來て、將校下士卒も皆二十八日に先程申上げた通り揃つたものでありますから、それで人を集めて各船に配つた。それから各指揮官の會議を開いて、其時に色々の規約閉塞方法はきまつたのであります。閉塞計畫の一部分は海圖に示してあります。(圖略)それからいろ／＼準備が出来

たところでこれは林大佐並に私が申出まして、旅順の電気燈見學に一つ遣つて貰ひたいといふ希望を、長官に持出したのであります。それは其時に見學に參つて、愈々其通りであるといふことを——旅順の電気燈の位置を確めた譯であります。どうして旅順の見學に參りましたかと申しますと、私などの希望では、驅逐艦、又は水雷艇に乗つて旅順の近くに往き、旅順の電気燈を見て來たいと云ふのでしたが、參謀長も快くそれを諾せられ、長官に御願をして根據地を出ました。さうして二十九日の晩決死隊の各指揮官十二人の内三人宛四艘に別れて參りました、驅逐艦は八艘參りました、四艘だけはアトに、四艘は一緒に往つたのです。それからさういふ行動になりますと、どうも敵地に近く驅逐艦のみを放すといふことは出來ませぬから、態々立派な艦隊を掩護として附けて下された、それは戰艦

日 露 海 戦 談

三艘、巡洋艦四艘でした。旅順の口に恰度午前一時頃參りました、モット前から電気燈は見えて居ります、廿九日午後十時頃から認めて居る。尤も旅順の電気燈はイツでも點けて居るといふ話しは聞いて居つた、月夜であらうが、雨の降る晩であらうが、いかな晩でもノベツにこゝにあります、城頭山、蠻子營、黄金山、嶗嶺嘴の電気燈は點けて居るのであります。此四ツの電気燈の見學に參つたのは、二十九日午後十時ころからで、此頃からズツと電気燈を認めた、段々近寄つて恰も五哩ばかりの處へ參つた、其時も林大佐が私の船で見學に參つたので、即ち村雨に乗つたのであります。村雨のフォールブリッジには、林大佐、それから私、それから閉塞隊に行きました高柳大尉と三人居ましたが、其時に林大佐は冗談ばかり言はれて居りました。ユナナ良い晩に電気燈を點けて居るやつがあるものか、丸

日 露 海 戦 談

で芳原の夜景でも見るやうだと言つて居られました。吾々もヤハリ冗談を言つて居りました、其の時には旅順の電氣燈の見學だけであつて、向ふから成るべく見付けられぬのを希望であつたのです、それで嶗嶺嘴から圓形を描いて城頭山の海岸を三里ばかり照らしますのと、黄金山と蠻子營から照らします具合を見たのであります。是れは私の想像であります、最初は嶗嶺嘴から照らし始めてズットまるく城頭山の海岸を照らします。此海岸は又閉塞隊のためにヒドイ冒険のことをやつつけられはせぬかと云ふ虞れがある爲め始終電氣燈を廻はして見るので、沖の方を五分間も照らして、ズット城頭山の前へ來るとしばらく止めて、十分も長く照らします。それから城頭山で照らすのは、イッデもきつと返す時に、直ぐに嶗嶺嘴の方を照らします。先きになりまして是れが強行偵察の時に必要がござ

日 露 海 戦 談

いますから、念の爲め付け加へてお話して置きます。それで見學に參つて此の電氣燈の位置も豫め確めることができましたから、再び根據地へ歸りました。三十日には總て人も揃へば船内の準備も出來ました。ところが其の前の船員から……これは特筆していただきたいと思ふのですが、郵船會社の船と、商船會社の船が重もであつたのです、閉塞船に徴發されたのは……此の閉塞隊に引續きをする時には、實に船長初め船員は決死隊に同情を表されまして、熱心事に當つて吾々に助力をしてくれた、流石進歩したる日本の二大會社の船員たるだけの厚意を表してくれました。どうぞこれは特筆して新聞に御掲載あらんことを希望します。しかしながらたゞ残念に思ふ事が一箇條ありましたが、其他の事は皆熱心に引繼をしてくれたので、吾々は大に便宜を得ました。死んだ隊員も、郵船會社商船

日 露 海 戦 談

會社員の厚志を先きの世で謝して居るだらうと、私は想像いたしました。

それから、此前の閉塞隊は、略ぼ一日か二日は船員と一緒に航
航行して居つて、船の具合も解つて居つたです。吾々も其通りや
て戴きたいといふ希望もあれば、無論長官の方もさうしてやると云
ふことでありましたが、如何なる御都合でありましたか……策
上……受取つてゆきなり、出て行くやうになつた。是は吾々が彼
是いふのではありませぬが、後ちに閉塞隊の際になつてお話を
ことに就いて關係があるから、チョット一言申上て置きます。それ
ですから前以て豫航運動は少しもいたして居らなかつた。

五月一日正午をもつて、閉塞隊は艦隊に續行して出航いたしました。
出航をいたします時には、速力が遅かつたものでありますから、總

日 露 海 戦 談

て少しも故障はなかつたです……十二艘ともその晩は——午後五
時に出て午後七時に沖で列を整へ、それで艦隊の後を付けて参つた
のであります。夜半に至つて霧がかかり雨が降つて來ました。半
速力から又微速力ひそくりやくになつた、微速力の爲めに尙ほ機械を廻はしたり
することが樂でありました。夜通しそれをやつて居りました、翌二
日午前七時頃になつて霧も霽れてしまひ、風も北西になりました、
それに霧がスツカリはれて艦隊の往くのも解るし、吾々も揃つて往
くのが解りましたから、微速力ひそくりやくから速力を増すと云ふと、前以て豫
航運動をして居らなかつたから蒸気が悪くなつたりして、十二艘の
船が大ぶん同伴が困難のやうに見受けられました。ところが案の如
く一艘の船に故障が起りました、それで林總指揮官は此時續いて來
られない船は一番列の最後に付けといふ命令を下されました。それ

日 露 海 戦 談

で列の最後に續いて往きあつたところが、林中佐も御心配でござい
ましたか、旗艦に一艘の船の蒸気がよく揚らず、付けて來られぬと
いふことを信號をなされたものですから、三笠から、至急に報知艦
をお出しになつて、〇〇丸を〇〇に返へせといふ命令が出ました。
そこで十二艘揃つて居りました所が一艘減りました。次ぎに私の船
でございます、△△丸、之は又閉塞船の内へはいつて居りませぬ、
丁度〇〇丸が故障を起すと同時に、私の船も舵に故障を起して、舵
が利かなくなつたから、列外に出てしまつた、さうして速力を緩め
て舵を直しにかゝつたがナカ／＼直らぬです、蒸気機械が故障とい
ふことを認めましたからタゞ手で把るハンドステヤリングの方に代
て取て見たところが、人間が三人位で取れるやうであるから、ハンド
ステヤリングで直して、又元の位地に就て他の閉塞船と駢んで往た。

日 露 海 戦 談

林中佐は△△丸に居て指揮權を執つて居つた、十二時頃になつて漸
く速力を増して參りましたところが、閉塞船は艦隊の左翼に出よと
いふ命令が出ましたから、皆左翼に出て艦隊と駢んでいつた。夕方
頃までズット列んで往つた處が、先程申上げた北西の風が霧を吹き
拂つて漸々十二時頃まで強くなつた。十二時頃には——海軍では風の
力を一、二、三と云ひますが、其時の風は五、六位の力です、若し
之に横浪を受けると非常に揺れたのでありますが、幸ひ頭から來る
風でありましたから揺れなかつたのです。それから十二時頃が一番
強くて又下り坂になり、漸々旅順に近寄ると向ひ風でありますから
大したことはないと思つた……ヤハリ旗艦でもさう思つて居られ
まして、ドン／＼旅順へ向けて參ります中に、私の船の故障も午後
三時頃出來上りました。七時間も経て造り上げたのです。御承知の

日 露 海 戦 談

通り閉塞船は機関部が二直——二直と申しますと機関部の機械を廻はしますのに、半分は機械を廻はして居り、半分は休んで居る、此二つで交代して居ることをいふのであります……二直でやつて居る所が舵機が破れたものですから、休む者がなくなつた、水兵部は出来るだけ人を減して往きましたから、二直しかない、然るに舵が破れて手で把る舵となりましたから非常に力が要る、それが爲め誰も休む者がなく、△△丸の船員はノベツに働いて居りました。午後七時ごろ旅順の東五十湮ばかりなる圓島に近寄りました。時に三笠の司令長官から、大へん御心配であつたと見えて、ドウも天氣が好くないから——天氣がをかしいと思ひなすつたものですから、林總指揮官に向て信號が參つた、其信號は天候不良と思ふ、今夜閉塞作業につき林總指揮官の意見を問ふといふのであつた。それは其の通り

日 露 海 戦 談

でありませぬ、其の意味で參つたのであります。それから林總指揮官は、今の風は地風につき、旅順港口は浪靜なりと思ふ、今夜閉塞を決行する決心なりと云ふ御返辭をなされました。これは其の通り確に信號が三笠に往つた等であります。ところが、十二時頃から段々風が風ぎて、七時ごろから北風になつた、先づ風があるか無いかといふ位であつたから、さういふ御返辭が出たのであります。

圓嶋の所で艦隊と袂を別つ時間が迫つて来て、丁度七時半頃艦隊と別れました。其時は一回二回の折、やりましたと同じことで、ヤハリ艦隊は反航で、吾々は旅順に向ひます、三回萬歳を唱へて、各艦皆無事に別れをして下さいました。又豫め成功を祝すといふ信號もあ上げになつたやうに覺えます。吾々はあまり近來萬歳々々といふことが多いので、萬歳は人殺し聲だと冗談を云つて居りましたが、

日 露 海 戦 談

今又こゝで萬歳を唱へられて、又人殺し聲が始まつたと云つて冗談言つて居つたのです。其萬歳の聲と共に艦隊は反航し、吾々は旅順の口へ向て参りました。それから林總指揮官が「遠矢君、君少し休み給へ」と私にかう云つた、ナゼかと申しますと、前晩から霧がかゝつてお互に船の位置が解りませぬ、晝間は風があつたり舵が破れたりしたものですから、殆ど休まなかつたのであります、それで林總指揮官が私にチツト休めと仰しやつた、どうぞお願ひしますと云つて私は下に下がつた。それから一時間たちますと林總指揮官も……私の船の指揮官附は中村良造中尉です、其方が林總指揮官に代つたので、林總指揮官は吾々の所へ降りて來られたのです。其時吾々は艦長から戴いた乾鰓を煮て腹を拵へる準備をして居つた、林總指揮官がソコへお出になつて鰓を召上て、さうして私に冗談を

仰しやつた。「遠矢君、あまり鰓を澤山食ふと腹へ露助の弾が中つた時も、臍さいから鰓が出て露助に笑はれるヨ」と言つて笑はれたことがある。其のやうな冗談は、林總指揮官は時々仰つしやりました。それから林總指揮官の御決心はといふと、全く成功を重んじられて居つたが、助かりもし成功もすることはさらに望む所であるからといふのであつた。若し此度もしくぢつたならば面目ないといふ決心はあつた。それは何故かと云ふと、話はアトに戻りますが、一回二回の閉塞は皆様御承知の通り、吾々に手本を示して下さいましたが、結果に至てはあまり思はしくなかつた。それで今度の閉塞は無論大頭のところでは甘くやりさへすれば出來るといふ決心があつた。一遍二遍やりそこなつても何遍でもやるといふ決心があつたと私などは見受けますものですから、兎に角私共も林總指揮官と同じこと、

成否は兎に角、全世界に對して日本の海軍が旅順口ぐらゐの閉塞が出来ないと笑はれてはいかぬといふ決心をもつて居つたのです。中にも有名な白石葎江、それから湯淺竹二郎、野村勉とか皆録々たる決死の士が、其決心で居つたのは私がいふ迄もないこととあります。恰度出發の朝です、大嶋艦長……故廣瀬中佐の兄さんが△△丸へ御出になつて林總指揮官を送られた時に、廣瀬中佐最近の寫眞を贈られたことがあります。林總指揮官はそれは閉塞に往かれる際にポケットに入れられて居つた、さう云ふ所から見れば、無論林總指揮官は生きては歸らぬといふ御決心であつたと私は認めました。これは序にお話して置ます。それから私に「遠矢君チット寢給へ」と御勧めになりましたから、私は命に従ひ下甲板に行き、艦艀を喰ひ、八時から十時まで寢て居りました。それも腰掛の上に轉んで居つた

日露海戦談

のです。ところが十時ごろになつて、水兵が来て「指揮官、指揮官」と云ふから、何かと飛び起きたところが、總指揮官がお呼びですと云ふのです。モウその時は私は解りました、船がチャブ／＼揺れるから、イヤしまつたと思つて直ぐブリツヂへ往て見ましたところが、随分ひどい風であります。それが午後十時で、風は五から六ぐらゐです。しかし方向は北西の反對で、南東の風であつた、殆ど大洋から吹く風であるから、浪が立つのも道理です。おまけに横浪であつたものですから、船の動搖は非常であつた。それ故、第一回第二回の閉塞の如く、ボートを水際まで卸して往つたのですけれども、又高く釣上なければならぬことになつた。ナゼかと云ふと、水際に釣て置くと大切なボートが風の爲めに波にさらはれるから堪りませぬ、各閉塞船共皆ボートを上へ釣り上げました。さうして林總指揮官の

日露海戦談

所へ私が往きますと、林總指揮官が「遠矢君今夜私は止めやうと思ふが君のお考へはどうか」とお尋ねになつた。實にどうもそれは不運であつたです。天候の爲めに已むを得ません。其時林總指揮官の御意見はかうであつた。私は成功を期してゐるけれども、成るべく十二艘の乗組二百五十何人の者は助けてやりたい、此波では閉塞は出来るけれども人を助けるとが出来ない、己れは死んでも宜い、がアトの部下の者は助けたい、此波で旅順に往けば、無論港口は非常の波で打込んで居るであらう。見す／＼かういふ晩を選んで閉塞しなくても宜からうかと思ふ。長官が林總指揮官に閉塞の事を御依頼になつて居る以上、一日、二日遅れたところが、作戰上差支ないからと長官も言はれて居るのでありますから、極く至當のお考へをお出しになつたのです。それで私は御返辭に苦んだのでございます、意

見を出せといふのですから苦しみましたが、再三も前一個の考へはどうかといふことを言はれたから、私は一個の考へは述べましたけれども、兎に角總指揮官の御意見通りなさいました方がかういふ時には迷ひが起りませぬから、御意見通りなさる方が宜からうと答へました。

この時が十時半で、いよく御意見通り御決行なさることになりました。先づ赤城に今夜は延期すると云ふことを各船へ傳へてくれといふことを頼みました所が、赤城はブーブも鳴らす、明りも出して夜中信號をやりましたけれども、トゥ／＼それが行き渡らなかつた。それから總指揮官は私に左の方へ舵を取つて參れと命ぜられましたから、取舵十五度で此船は旅順に反航しました。二番船三番船まで續いて來たのを見た、其の他の船も曲げたのを見たやうですけど

も、直ぐに見えなくなつた。それは或る一艘の船が前へ往つてしまつたので、皆總指揮官のアトへ續いて來るのに迷つた、迷つてしまつたからそれで私の方に續いて來るのは二艘、他のヤツはズン／＼ヤハリ旅順の方へ往つてしまつた。それで私は、どうもこれではいけません、かうマチ／＼になつてはいけませんと申し上げて、それから速力を緩めて皆の様子を見て居りましたところが、一向参りません。そのうちトウ／＼十一時になつた、どうも此月夜の晩に往てしまふ筈はない、つけて來なくちやならぬと心配されて居りましたけれど、ドウも事が齟齬して終つたので已むを得ません。此船は幸ひ速力も早いから呼び還へしに往かうと相談が纏りまして、直ぐ引還へして参りました。すると恰度一時半には、旅順の城頭山を距る五湮許の處へ参りましたが、まだ一艘もつかまひ切れません。とこ

日 露 海 戦 談

ろが一時半になりますと私の船が晝間故障のあつた舵が又ハツタリ破れてしまつた。かうなつては攪へ切れません。そこで、林總指揮官は、モウ仕方がない、アチラへ己の船も衝込まうと言はれた。もとより吾々も非常に望むところであつたから、私は閉塞用意の命令をかけました、すると下士以下も非常に悦んで、或る者はタンピラを背中へ負うて襷に掛け、或る者はピストルを腰に挟み、或る者は小銃をもち或る者は短刀を持つてゐる、水兵帽子の上へ鉢巻をしてゐる者もある、實に殺風景でありました。もし其時にあの有様を側から見て居たら、實にをかしかつただらうと思ひました。其命令をつたへて閉塞の用意が出来た時分、私の船の舵がバツタリ倒れてしまつた。つひに機械を止めて舵の修繕にかゝつた。がそれが一時半過ぎでございました。それから二時までかゝつて修理して居りました

日 露 海 戦 談

ところが、二時頃になるとドン／＼と始まつた……恰度旅順の口で、しかし五分間ばかりで済みました。此二時のときの砲聲は何かと云ふと、日本の水雷艇が先きに往つたのである。旅順の如き所は一體ならば此港口を防禦するには、防材を設けるのが必要であります、水雷艇などがはいつて来ないやうに、此防材が張つてあると閉塞が出来ぬから、それを見にいつた水雷艇が先づ撃たれたのであります。二時半になれども私の船はまだ修繕中ですから、ヤハリストップして居つた、すると此度は非常に連続して打出した、これはホントウの閉塞船が参つたので、即ち第一が三河丸、つまり是れは四番目に往く船が一番先きに往つてしまつた。それから續いて遠江丸、それから江戸丸、それからこれはよく解りませぬが佐倉丸か小樽丸か其中のどつちかゞ一艘往つて居る。其將校は野村大尉か白石少

佐か此二人の中の一人である。白石は佐倉丸で野村は小樽丸であつた。其次に往つたのが愛國丸で、其次に往きましたのが相模丸、次に往きましたのが朝顔丸でした。それだけ参りましたが、影かたちの見えないのが數艘ある、アト皆影かたちが見えて居ります。それから長官の公報通り、五艘は確かに影かたちを見せて港口を閉塞して居るのです。港口に迄達し得ずして敵の水雷若くは砲丸に中られて沈められたのが朝顔丸です。これは實に遺憾の事でありました。老虎山沖へ朝顔丸は沈められましたして影かたちは見えて居るのです。其見えなくなつたのは相模丸です、マストも煙突も見えない。さうして佐倉丸か小樽丸の内どつちか一艘見えませぬ、それ故五艘の他に見えない二艘も或は良い位地に沈んでゐるかも知りませぬ。長官の報告は極く確かなものゝ外は出しになりませぬ、それは皆様御

承知の通り、實に此度の海軍の公報は、曖昧の事は決して御出しになりませぬ。吾々は尤も自分の仲間の者が仕事をしたのですから、相模と小樽は屹度うまい處へ往つて、マストも煙突も鐵砲の丸で打切られてゐるだらうと思ひますけれども、それは只想像でありますから其のまつもりて。

相模丸に就て一の勇敢なる事があります（軍機に關する故之を略す）私も亦五湮の處で相模丸の勇敢なることを認めました。それから恰度二時半から三時四十分頃まで連續砲聲が聞えた、これは八艘の閉塞船が往く間に撃たれたのです。ところが私の船は五湮の所でまだ舵が直らぬ、四時までかゝつても直らぬ、追々夜が明けて來ると敵から認められる、おまけに砲臺からは一萬米突ならば撃つことが出来る、これではいかぬと思ひましたから、トウ／＼舵の鎖を外づして沖へ

日 露 海 戦 談

日 露 海 戦 談

出ましたところが、旅順を距る七湮位の所で夜が明けて來て霧が懸つて來たから、私の船は此處でストップして舵の修理にかゝつた。五時になり五時半になり六時頃になつて、味方の艦隊が來て、私の船は如何にせしやと尋ねましたから、舵破れ閉塞出來ぬと云ふ返辭をしましたら、其事を沖にある三笠に信號したのか、三笠から命令があつたと見えて、高砂が來て其船を引いて某嶋に往けといふ命令を受けられたから、今引船をやる用意しろといつて來た。其時はモウ舵が出來るといふ見込が付きましたから、私は引かるゝに及びませぬ、單獨に往きますとお断わりをして、それから又修理にかゝつたところが、又一時すると三笠が來た、それが恰度八時頃です。三笠にとツつかまつて某嶋へ歸れといふ命令を受けたから、仕方がなしに某嶋に歸つた。ところが其歸る途中某船に出會した。つまり此船も閉塞

船中の一艘であります。はいらなかつたのです。此船は私の船のアトをつけて往つた、爲めに豫定の非航路を取つていつた、けれども私の船が又引返して來たのですからドコへ往つて宜いか解からぬ、又夜が明けても突込む決心であつたが、私の船に遭つたのですから私の船の跡をついて來いといつて、某嶋へ向けて往つた。其時に私は人間らしくなかつた、躍起となつて居つた。それで林總指揮官にお願ひして夜が明けてもあかるくツても何んでも宜いから、突込まうぢやございませぬかと言ふたら、今のやうに風が凩ぎて靄があれば、舵が損じて居つても成功するかも知れぬと云はれましたから、それでしきりに舵の修理を急いで居りました。ところが、今お話した通り、終に三笠艦に攫まへられて已むを得ず歸つた譯であります。其時林總指揮官はかう言はれた、八艘確かに往つてアト數

艘残つてゐるが其數艘で再擧を計ると云ふことも出来るから、遠矢君さう躍起とならんで再擧を待ち給へと。林總指揮官の慰めらるまゝに私は其命に従ひました。林總指揮官はナカ／＼注意周到指揮宜しきを得た人であります。

某嶋へ歸りましたのは五月三日の夕方、其處には落武者が數艘居あはせ、此數艘の指揮官並に林總指揮官等が皆がツかりしながら、八艘は往つてしまつたぢやないか、これぢや吾々は活きもや居られぬと云ふ極端な相談まであつた。そのみならず下士以下が皆その通りですから、將校は心には残念といふことを思つて居ても、彼等の前では彼等を激昂させるからといふので専ら彼等を慰めて居りました。其間に八嶋が某嶋に歸つて來たから、八嶋に頼んで旅順の沖合に居つたり他の方に往つたりする三笠に、無線電線でお願を申入れ

た。それは明日（三日か四日）の午後二時出航して其晩に閉塞を再び行つては如何御承認を願ふといふのでありました。ところが其返辭に命を待てといふことが参つた、只命を待てば遺憾でありますから、此度は御承認を願ふのでなく出航するといふやうな意味で又長官にお願ひをしたところが、其時には大變叮嚀なる御言葉が出て、他に爲すべき事がある、命を待てといふ内意があつたものですから、これは何か長官に決心があるものと見えて、二三日過ぎたら遣られるものと心得て耐へて居つた。

それから五日に、三笠の居る側わきに來いといふ信號があつたから往つて見たところが、三笠は居らぬものですからがっかりしてしまつた。其時に龍田が側に居りましたから、龍田に頼んで無線電信で又デリ云つてやつたところが、ヤハリ命を待てと來る、それから手紙

が参りました、各指揮官に宛て、それは參謀長からの私信でありました。それで仕方がなく、ウンともスンとも言はずに待たうと云ふことになりました。それから六日に三笠に出逢であして大に其志のある所を述べましたところが、三笠から水雷艇を送り來つて吾々をお喚よびになつた、それで長官の所へ参りますと、參謀長其他の幕僚まくらうが甲板まで出迎へられ、君等の心中は察するといつて吾々は引上げられました。それから長官の所へ往くと、長官から叮嚀なる御言葉があつた、參謀長からも勞いたはつてくれました。

七日、八日、九日の間は、吾々は世間に顔出も出來ず實に面目がなかつたので、閉塞船に蟄居して居りました。ところが十日頃になつて、某艦が來てそれに乗移れといふことで、私は十二日に乗り移つたです。それから強行偵察の準備に取掛りました。其間にいろく

な奇談がございますから、チヨット御話して置きます。

先程某閉塞船が途中より歸れといふ命令を受けて、或根據地へ歸ります時、(歸りますには七十湮位しかありませんから十二時間ぐらゐの掛れば六ノットで往けるです)指揮官は長官の命令で面舵を命じた所が舵手が舵を執らぬ、指揮官の命に従はなかつた、旅順にはいるに極つて居る、歸れとならば舵は執りませぬと云つてどうしても言ふことを聽かぬ。指揮官は困つても前はなぜ己れの命令を聽かぬかと言つたやうな話し。ところが機關部の火夫が上つて来て、指揮官歸るのですか、歸れといふ命令を受けて歸らなければならぬ位ならば機關も叩き破し、釜も叩き破します。モウ私は見す／＼歸るとは出来ませぬからと言ふ。機關兵曹も怒つて居るです。それから指揮官は非常に窮してしまつて、待て、己れにまた良い方法がある

から、さう躍起となるなど云つて、それから海圖を示して今から行くと恰度午前六時頃に先方へ著くことになる。サア是れでも宜いならばお前達の希望を入れる。午前六時に着くから夜が明けて旅順口へ晝間でも突込まうと云ふことになる、それでも宜いと云ふならば突込むがどうかと云つたところが、皆モウ構ひませぬと云ふ譯で、ヤハリ遅れて續いて來た。然るに始終其船の側に着いて居つた龍田から旗艦に某船は歸れと云つても歸らぬと信號したらしい。さうした所が旗艦から又一の訓令が出て、今夜某島へ往け、閉塞は天氣が悪く止める、某島へ往つて命を待てと云ふ。前には根據地へ歸れと云はれ、此度は某島へ歸れと云はれるのは閉塞を止めにするのかも知れぬ、これは己れなどを瞞すのだと云つて、又怒り出してナカ／＼聽かなかつたさうです。それは決してさう云ふ意味でなかつ

たのですが、下士以下の躍起なる有様はこれでも解ります。それから龍田と並んで往きつゝあつたところが、火の焼き方が困難になつて、殆ど休む暇もなく火夫がのべつに働いて、明日の朝までやつて居つては身體が續かぬと思つたらしい。そこで指揮官は彼等は案の如くヘコタレタと思つたから、先きの命令通り、今夜に限つた閉塞でもないから、閉塞の十分出来るやうにしてから又願を出したら宜からうと言ひ聞かせて、ヨウ／＼某島へ引揚げたところが、某船は先きへ某島へ歸つて居た所へ、仲間外れの數艘がそれへやつて來たものですから、士氣を鼓舞したことが非常であつたと、吾々は想像して居る。

それから三日も四日も閉塞の命令が出ませぬから、漸々躍起となつて殆ど逆せ上つた。或部分に自殺でも起つては困ると私など心配し

て居つた、幸ひ自殺する者も出ませんでした。それは各指揮官が注意して下士以下の心情をも察して居つたので、色々慰めた爲めでありませぬ。若し捨て置いたならば、屹度下士以下の自殺する者があつたらうと私は考へます。

他にも其様な事はありますが、餘り長くなりませぬから止めます。

第 三 次 閉 塞 船 隊	船 名	船 質	總 噸 數	製 造 年 號
▲	遠江丸	鐵	一、九五三	一八八三
▲	相模丸	鐵	一、九二六	一八八四
▲	三河丸	鐵	一、九六七	一八八四
▲	佐倉丸	鋼	二、九七八	一八八七
▲	江戸丸	鐵	一、七二四	一八八四
▲	小樽丸	鐵	二、五四七	一八八六
▲	愛國丸	鐵	一、七八一	一八七九
▲	朝顔丸	鐵	二、四六四	一八八九

本田少佐と遠江丸

六六

○本田少佐と遠江丸

第三次旅順口閉塞船隊は、明治二十七年五月一日第二集合點を發し、聯合艦隊掩護の下に單縱陣にて旅順口に向ふ。當夜濃霧に會し、陣形の維持頗る困難を覺えたり。翌二日朝に至りて、霧晴れ、西風起る、船隊中速力遲緩なるものあり、六番以下の諸船後るもの多し。我五番船遠江丸は、幸に速力を維持するを得たり。午後、戰隊は速力を半減して船隊の追及を待つ、稍や久うして漸く陣形を整ふることを待たり。本日風波穩かならざるが故に、豫定の行動を決行せらるべきや否やを窺かに疑はしめたりしが、是れ午後七時を待て始めて確知す可き所なり、而して夕刻に及び、風波稍や風ぎたるの觀あり。豫定の時刻に至り戰隊と相別る、茲に余は決行を確信して再び

敢て狐疑する所なかりき。

是より驅逐隊、艇隊及び砲艦等の掩護に依り、目的の方向に航進す。夜十一時過ぎ、南風（風力五乃至六）俄かに起り、怒濤舷を打つ。機砲其他甲板上の諸具は浪に洗はれ、半降せる端舟は動搖激しく頗る困難を感じたるも、事此に至て又如何ともすること能はず、指揮官附森永中尉二三の兵員を指揮し、力を盡して僅に端舟を奪はれざるべき方法を講ぜり。時に航路に漂流せる無人の端舟を見る、是れ恐らくは激浪に奪去せられたる僚船の端舟なりしならん乎。此時本船の針路は西微北にして、黄金山下の電燈を北西に見る。遙に前方を眺むれば、四個の探海燈交々海上を照映すると、曾て視察せる時の如し。此に於て余は全水兵部を船橋に集め、探照燈の位置闖入針路等を説明し、以て各員をして軍令承行の順序に依り、指揮者に

本田少佐と遠江丸

六七

代りし場合の心得を知得せしめ、且つ曰く、今や陸上に於ける我第一軍は鴨綠江に敵軍を破り、第二軍は將に明日を期し一舉して數萬の大兵を某地點に上陸せしめんとす。今夜の閉塞と相待て旅順の敵軍は將に海陸共に包圍せられ、其亡滅近きにあらんのみ。實に我邦未曾有の大戦にして、此作戦の一端に參與するを得たる我等の榮譽も亦大ならずや。若し今夜鬼籍に入り、此大戦の結果を見届けざるを遺憾なりと思惟するあらん乎、請ふ憂ふる勿れ、我軍必勝つ、黄泉に在て之を大觀する豈亦愉快ならずやと、士氣更に振奮を覺ゆ。午後十一時二十五分頃一番船の左方に回頭せるを見る、同時に敵の所在に當りて砲火を見砲聲を聞く。余は斯く判断せり、本船より先頭約一海里に航進せる一番船は、我前方警衛に任ずる艇隊が、敵港を距る未だ近からざる沖合に於て、敵の驅逐艦と交戦せるを目撃す、此に

於て總指揮官は戰機未だ熟せざる此間に於て、船隊を進むるは徒に敵襲を受け、中途にして我目的を阻碍せらるゝの虞ありとなし、茲に一度反航し更に機を見て再び原針路に復するの策を探りたるならんと。斯く觀察し來れるは進退の理由自ら明かなるを以て、本船の針路を轉じ船隊首力の向ふ所に従ふ。此時四番船猶ほ依然たり、余以爲らく、彼船をして獨り不利の地に陥らしむるは眞に忍びざる所なれども、亦如何ともする能はず、然れども彼亦次て來る可き情況に着眼せんか、必ず直に引返すべしと。

是れより本船は東微南に航すること約三十分間、黄金山下の燈光を約北西に見て、漸く集合せる船隊の附近に近くを見れば、船隊の序列錯亂して其番號順序等を識別する能はず。各船舷燈を點出して只管相互の衝突を豫防するに汲々たり。爰に集合せるもの本船と共に

本田少佐と遠江丸

七〇

六隻を認む。時に風波益々猛威を加へ、船體動搖尠ならず。本船は半速力微速力或は右航或は左航し、孜々として他船と互に航路を相譲るの間、知らず識らず僚船相見失ひ、一時茫然として殆ど爲す所を知らず、窃に以爲らく、不幸なる哉、既に連絡相失し、指揮の統一を仰ぐに由なし、已むを得ずんば此より獨斷專行を以てするの外なしと、即ち意を決して原針路西微北に復し、原速力にて航進す。偶々煉炭焚火不良にして俄に汽力を發するを得ざりしより、已むを得ず和炭を用ひ、漸く汽力を増加するを得たり。熟々前方を凝視すれば、二個の燈光を認む、依て思ふ、是れ必定先頭一二船の尾燈ならん、余徒らに躊躇して後れたるを悔ゆれども及ばず、是れより力を盡して彼に追及するに若かずと、即時意を機關長に通ず。機關長竹内大機關士、奮勵一番大に努力せるの結果、汽力俄に加はり、幸

に意の如く前船に接近するを得たり。時々敵の探照に依り、前方に航進せる一隻は、明に是れ相模丸なることを發見す。之に依て察すれば他の一隻は恐らく愛國丸ならんか。此二隻は十一番船及び十二番船にして、或特別の任務を有するものなり。此に至り余は窃に嘆息且つ決する所あり、我れ過てり、此兩船の後尾に在て進む時は不利云はん方なし、若し已むなくんば兩船横陣を作る時、其中間に進入せんと。時恰も好し汽力大に加はり、速力意に隨て増す可し、依て兩船を追越せんことを圖りしに、幸に難なく其左前方に出づるを得たり。次て後方に二隻の僚船と、左方に一隻の砲艦同航するを認む。

是れより前き午前二時頃、旅順口に砲火の旺なるを見る。是れ僚船第一次の闖入と思はれたり。午前二時二十分頃、黄金山下の電燈を

正北に見るや、豫定の如く變針し、之に向つて直航す、即ち針路正北なり。須臾にして再び旅順口に砲火盛なるを見る、是れ僚船第二次の闖入と思はれたり。本船は曩に追越を圖り、全速航進したるの結果、今は却て孤立の地位に立ち、後續諸船と相距ること約一海里、而して黄金山を去ること約二海里半の處に在り。抑も今回作業の成功を心算すべき要素は、第一船數の多と、第二相互の連絡を維持するにあり、然るに不幸にして天候の妨ぐる所となり、是等の要素は將に悉く破毀せられんとす。即ち第一次及び第二次の闖入毎に、約三十分時間の猶豫を置き各船獨行せるは畢竟得策にあらず、願くは今次に於ては出來得る限り集團して闖入せんものと、茲に速力を減じて後續諸船を待ちつゝ、針路を正確に保てり。須臾にして四隻の後續船稍や接近し、本船も後方より追送する高濤に

押されつゝ、今や將に城頭山燈光を西々北に見んとす、此に於て全速力となす。機械回轉數六十五、速力約九海里半、之に強風追浪を加ふ。次で敵の發見する所となり、漸次其砲撃を受く。城頭山燈光を西に見るや、港内敵艦よりも探海燈を點し、黄金山蠻子營及び城頭山等の燈光集射して眩惑恰も太陽を視るが如し。然れども港内の砲艦及び老虎尾等より探照砲火盛なるを以て、却て港口を識認するの容易なるを覺えたり。依て最後の針路を北々西に定め、港口の中央に向て突進す。港口を距る約一海里に入るや、敵の集弾砲火は實に猛烈を極め、附近の海水を奔騰せしむるの壯觀、船内各部に爆裂して諸物を破壊するの慘烈、内外轟然實に壯とや云はん烈とや云はん、情況殆ど筆舌に盡し難きものあり。此間指揮官附森永中尉は、能く指揮官を補佐して専ら前方監視の任に當り、時々高聲を發して愉快愉快

と叫ぶ。甲板下の下士卒亦異口同音に愉快々々を以て應答し、士氣更に揚るを覺ゆ。本船には機砲二門を装備し、適當の距離に近づけば發砲せんと準備せしが、未だ幾何も近づかざるに敵彈先づ其附近に爆發して其一門は忽ち破壊せられ、砲員坂上二等水兵負傷す。次で他舷の機砲も間もなく破壊せられて全く用を爲さず。此時尖岩の外方に在て紅光を揚げたる僚船を認む、是れ第二次の僚船自ら港口の左岸に達したることを後方に通報するものと識られたり。港口に近づくに従ひ、敵彈の本船に命中するもの刻一刻に増加し、其距離約半海里と覺ゆる處に至て、敵の視察水雷本船の兩舷附近に爆發する者、前後四五發に及びしも一も命中せず。又雨注する彈丸は、船橋、海圖室、諸甲板、端舟、機械室、汽罐室、炭庫等到る處に穿孔爆裂して猛威を逞うせしも、僥倖にして船の進航を阻止するに至らざり

しが、敵彈の破裂或は通過に依て起る大氣の激動の爲め、羅針盤の燈火を消滅せしめたるを以て、余は直に羅針盤の覆蓋を除去し、探海燈の照映を利用せんと欲せしも、此時既に諸探海燈は我正横後にあたりたれば、時々港内より振向くる探照に依り、辛うじて羅針に注目するを得たり。次に余が耳邊を掠めて通過せる一彈は船橋上に破裂し、余と殆ど並立して按針の職務に餘念なかりし田中信號兵曹を斃せり。余は直に自ら操舵を掌り、前方を監視せる中尉をして田中の急を救はしむ。中尉は手早く應急の手當を施し、再び原位置に就けり。今迄眩惑作用に苦しめられし我等は、此時より亦闇黒場裡に惑はんとす、時將に港口中央に達せりと思惟する一刹那、港内砲艦老虎尾砲臺等より猛撃せる直射彈は、夥く本船に命中して、汽罐汽筒を穿貫し、蒸氣の逸出凄じく、舵機を毀ち、前檣を折り、羅針盤

を粉碎し、船橋に火を起す等、前後續々破壊せらるゝ物擧げて數ふ可からず。されば今迄全速力にて猛進せる本船も、忽然停止して恰も坐洲せるかの觀あり、而も微少の震動をも感ぜざるは稍奇怪の念に堪へざりしが、事茲に至ては最早や他に爲す可きの術なく、只一意確に港口に達せるを信ずるが故に、爆發装置を害せられざる中に、一刻も早く爆沈せんと欲せり。此時豫て錨並に前方監視の役務に従事せる中田兵曹は、曩に負傷せる坂上水兵をして船橋に來り投錨して宜しきやを問はしむ。余は答へて曰く、本船全く停止せり、投錨の必要なし、早く電纜を検せよと、次て爆發及び端舟準備を命じ、中尉に令して往て爆發せしむ。中尉は汽機の停止を命じ、直に右舷に備へたる爆發電纜に到り見るに、果然悉く破壊飛散して發見するを得ず。依て直に左舷の電纜に就き、機關長と共に其隔縁を解き爆

木田少佐と遠江丸

七六

發を了せり。是れより先き機關長は機室に在り必死となりて機關部員を指揮せしが、上方に破裂せる彈片及び船具の破壊せられたる物夥しく機室に墜落し、船體を穿貫せる彈片は炭庫を破つて侵入甚だしく、室内の諸器具は破壊せられて殆ど汽機の運轉を害せんとするに至るも、猶ほ自若として諸員を指揮せしが、任務終局の間近に至りて、汽罐及び低壓汽筒を破壊せられ、如何とも救ふべきの術なきを以て、命を待たずして自ら汽弁を鎖し、機關部員を上甲板に昇らしめたり。然るに階梯は悉く毀たれ、昇るに途なかりしかば、諸員は辛うじて壁隅を攀登し、漸く甲板上に出て來れり。又坂上水兵は、指揮官の命を中田兵曹に傳ふるや、直に相携へて端舟の準備に取掛れり。所有の端艇は六隻なりしが、見渡す所一隻として完全なるものなく、多くは粉碎の姿に在り。唯左舷前部に在りて後部のポート

木田少佐と遠江丸

七七

ホールを切斷せられ、斜めに懸吊せるもの一隻は、稍や外形の宜しきを見て直に其用意を命じたり。

余は、曩に中尉に爆發を命じ、船橋に在りて周囲の状況を觀察しながら爾後の命令を下しつゝありしが、何ぞ計らん自ら坐洲せりと思惟せる本船は、忽ち船首を西に向け南方より打寄する激浪は、正横より左舷を打つに至れり。(港口に防材二條あり、其内外の距離四五十米突、各材は直徑約二尺、長約二間許の幾多の圓材を連續し、所々に浮標を設置せり。本船は初め第一の防材に衝突するや、之を内方に壓迫して弓形ゆみなりとなし、其將に第二の防材に觸れんとする頃航路停止し、同時に港外より押寄する怒濤は艦部を壓し、船體を防材に並行せしめたること後にて明白となれり。是れ豫め前方監視の爲め、特に双眼鏡を授け、前甲板に位置せしめたる中田兵曹の實見陳述に依る。)此時早く彼時遅く、爆聲一發火焰僅に上甲板に出て、本船は立ろに沈没し始めたり。余は豫期の如く船橋に放火せんと思ひしが、此處に田中信號兵曹横はり居るが故に、附近に石油を注ぐ時は同人を燒死せしめんとを慮り、且つさなきだに船橋の上面は敵彈の爲め已に燃焼しつゝあるを以て、更に油を注ぐとを斷念し、速に負傷者を運搬せしめんと欲し、橋上より一二の兵員を呼招したれども、皆疊して解せざるを以て、余は趨つて中田兵曹を壓き、其耳に口寄せて速に一名の兵を伴ひ、船橋上に斃れ居る田中信號兵曹を運搬せよと命ず。兵曹即ち福田機關兵を伴ひ、飛ぶが如くに船橋に駆け上り、田中を救うて端舟に移す、其動作極めて敏捷なりき。時方本船沈没の瞬間にあり、若し三十秒時を遅延したらんには、恐くは此負傷者を救ふ能はざりしならん。同時に兵員は悉く端舟の附

近に集り、之を卸しつゝあり。余は人員調査の爲め、豫め規定したる各員の番號を唱へしめんが爲め、大聲を發して自ら番號(一)と呼號すること再三なるも、一人として之に應答するものなし。余は即ち諸員皆聾せるが故に、其無効なるを覺り、咄嗟の間目測にて人員を調査せるも夜暗く且つ各員死力を出して動作しつゝあるを以て、遂に其正確を得るに由なかりき。此間本船は益々沈降し、端舟は全部水を以て滿され居り、兎に角水上に浮遊するものとは、此端舟以外に最早や一物無きを以て、皆辛うじて端舟に乘移り、先づ乗れる者は後者の手を執り、漸く艇内に引入れたり。余が最上甲板の欄干に右手を掛けて立ち、將に端舟に移らんとせし際には、海水早や余が腰まで來り、余が左手を兵員に曳かれて艇内に引上げられたるときは、總員已に乘艇し了り、同時に本船は全然水中に没して、僅

に煙突以上を現出せり。此間眞に一髪を容れ難き機會にして、當時の消息得て名狀す可からず。即ち激浪は斷えず眞横より端舟を本船上に打上げ、艇内は水と人とを以て充滿し、各員は身體水中に在るが故に動作自由ならず。此時前部のポートホール固結して脱する能はず、依て刀を以て之を切斷せり。又一方に於ては切りに艇内の排水を試みたりしが、圖らずも底部に大なる彈孔を穿たれ、防水排水共に効なきを知り、之を斷念せり。而も艇體之より以下に沈降せざりしは、全くエイヤケースドライブポートたるの賜とぞ思ひ知られたり。又舵を操らんとすれば、舵半ば破壊せられ居りて、艇の操縦意の如くなる能はず、轉輾動搖して將に顛覆せんとすること數次、其混雜の情況擧て言ふ可からず。漸くにして右を押し出し、或は左を力漕して、百方力を盡し辛うじて本船を離れしめ、逆捲く浪に艇首

を振向くるを得たり。而も尙ほ舵を採ること能はざるより、余は苦心の餘り兩手を後に廻はして、ヨークを腰に密着せしめたる上、腰を左右に捻りつゝ、辛うじて艇首を維持し、且つ右撓左漕を交々督促して、他を顧みるの迫あらざりき。時已に本船沈没し、且つ後續僚船の闖入に依り、敵の注意は皆他方に轉じたるものゝ如く、我艇に對して發砲するもの從て稀なりき。

かくて本船上を去ること少許にして、左方後部に他の端舟を漕ぐ者あり、暗夜にして充分識別するを得ざるも、内に三四名の乗員あるが如し。依て聲を發して「其ボートは漕ぎ得るか、大丈夫か」と問ふ。彼等亦大聲「大丈夫」と答ふ。依て我艇は半沈没のまゝ、水中を撓漕しつゝ、漸く沖合に出で、時々敵の探照と、其發砲を受けたるも、一二の機砲彈僅に身邊を掠めしのみにて他に危害を受けず。

而して彼の他艇に在りしものは、後に至りて一等水兵森下淺次郎、二等水兵中村市郎兵衛、及び一等機關兵野田京三郎の三名なること分明せしも、爾後の消息を識る能はず、空しく行衛不明となれるは頗る遺憾なり。歸途右方に方り本船を距ること南西約百米突許りと思ふ處に、容易に沈没を了せざる一條船あり、暫時の後該船沈没し、其乗員の過去する端舟を認めたり、此僚船は江戸丸なりしこと、後に至て分明せり。又我が退去後約三十分時經過の後、我端艇の左舷クォーターに當り、宛も波浪の暗礁を洗ふが如きを認め、一時我れ已にルチン岩附近を過ぐるか、さりとては速力の餘りに迅速にして、推想の方位著しく異なれるに驚かざるを得ずと怪訝に堪へざりしが、間もなく港口の南方約一海里の位置にある浮標を發見し、其ルチン岩かと疑ひしは、或は他の沈没船ならんとの事を自認せり。此時朝

本田少佐と遠江丸

八四

顔丸著しく黄金山沿岸に接近しつゝ、闖入するを見る。依て其航路の過れるを知らしめんと欲し、極力高聲を發して浮標の所在を告げんとしたるも、遠距離、砲聲、風力等に妨害せられて遂に達せず。該船も同じく猛烈なる砲撃裡に在て盛に機砲を連發しつゝ、航進せしが、須臾にして一旦敵の照映を脱したる以後、其消息を認むる能はず、後日思ふに是れ恐らくは黄金山下に擱岸せる一隻ならんか。かくて我端艇は漕撓一時間有餘にして、未だ港外一海里以上ならざるに一の水雷艇を發見せり。其餘りに深入せるより或は敵艇にあらざるやの疑念ありしが、聽て其水雷艇は敵の探照に曝露し、旺に砲火を蒙りつゝあるを見、初めて味方の艇なるを確認し、之に接近すれば既に一隻の端舟ありて、當に收容せられつゝあり、是れ愛國丸の隊員なり。次に我艇員も亦收容せらる。此際艇體轉動恰も獲らんとする

ものゝ如く、而して屢々砲撃せらるゝを以てその危険云ふ可からず、該水雷艇の一砲員が敵彈に撃たれて戦没したるは、即ち此被砲撃中に在り。此水雷艇は即ち隼にして、艇長は桑島大尉なり。大尉余に告げて曰く、曩には廣瀬中佐の一隊を收容し、今亦少佐の一隊を收容す、幸運何を加へん。而して本夜は荒浪斯くの如く、收容の作業頗る困難なれば、恐らくは閉塞隊員中他に又少佐等の如き幸運見を見る能はざる可しと。嗚呼後に至りて果して大尉の言の近く當りしは、實に遺憾と謂ふ可し。此時正に午前五時にして、我遠江丸の閉塞行為に在りしは、午前三時乃至三時三十分の間とす。それより艇内にて負傷者の手当を受け、夜明けて後第三戦隊に會し、午前八時隊員悉く淺間に移さる。此に於て閉塞隊員の生存者は、再び相會合するの機を得、初めて彼我の消息を疏通するを得たり。

此行動中、部下の乗員皆勇壯にして克く其職責を盡したり。即ち左に掲ぐるは余の目撃し、並に指揮官附森永中尉が親しく見聞して余に告げたる所に係る。但し機關部員は職務上常に余等と所を異にするを以て、自然余等の見聞に觸ること稀なりしかば、余は當時の機關長竹内大機關士に書を寄せて、當時其部下に屬し居たる兵員に關する所見を徵せんとしたるに、不幸にして其書は未だ君の手に入らざるに先だち、君已に逝いて他境に入り、書は空しく君を追うて終に及ばず、此程余が手に戻り來れり。感慨何ぞ堪ふ可けんや。

△指揮官附森永中尉 余はかゝる行動中に、中尉其人の如き人物を以て補佐となすを得たるは眞に多幸とする所なり。中尉は資性眞摯沈毅にして勇敢、加ふるに思慮深く其兵を指揮するや壯快にして眼中宛も敵無きが如し。若し今回の作業を以て假りに成功と云ふを得

ば、余は中尉の力與りて其多にありと謂はんのみ。中尉は、余に先ちて遠江丸に乗組み、諸般の準備を整へて余を待てり。已に發航するや、始終職務に鞅掌して倦むことなく、船内一切の準備は忽ち整備せられたり。その敵前に進むや、自ら挺身して最も能く前方を監視し、彈丸雨注を事ともせず、頻りに愉快くと叫んで士卒を勵ませり。殊に余の指揮を補佐するに方りても、注意周到にして悉く要旨を得、遂に自ら危を辭せず、勞を厭はず、爆沈の任務を了へて端舟に移り、勇氣凜然として萬歳を唱へ、自ら士卒と共に漕撓したり。

△機關長竹内大機關士 君は性質溫厚篤實にして、而かも凜乎として冒す可らざるの風あり。今回の行動中にも、熱心着實に其職務に當りて萬般の注意到らざる所なく、能く少數の人員を指揮し、其始めて乗込める船の汽機を完全に運轉し、復た遺憾とするの點なから

しめたり。我船が僚船を超越せる時の如き、唯是れ全く君の努力に依りて、我希望を達するを得たりと云ふべし。作業將に終らんとするの際、敵彈來て汽罐汽筒等を壊るや、君直に令して速に汽弁を閉鎖し、室内已に其要なきに至るや、自ら斷じて部下を甲板上に出し、彼等をして端舟の卸方を補助せしめ、自身は爆發行爲を補助したる等其處置皆宜しきを得て、更に間然する所なかりき。

△二等兵曹中田源次郎 兵曹は勇氣全身に満ちたる好丈夫なり。初め遠江丸に於て、諸員の配置を定めんとするや、余は彼等を各自の得意とする所に配置して畢生の伎倆を顯はさしめんと欲し、先づ兵曹に就て其得意の點を問ひしに、彼れ答て曰く、「私は何でもやります」と、此一言に依て余は大に兵曹を信用せり。蓋し兵曹の眞意は自ら稱して萬能と云ふにあらず、如何なる難事も敢て辭する所に

あらずとの献身的誠意に出でたるを知ればなり。而かも兵曹の砲術に長ずるは、其所有せる掌砲證狀及び臂章に依りて徴すべく、其運用術に熟練なるは其多年經歷せる乗艦の種類に依て判するを得べし。且つ其平生の行爲極めて活潑勇壯にして、兵曹として萬能的と稱するも敢て不可なきを信じたり。殊に彼の正直なる亦甚だ愛す可き點あり、彼れ閉塞船に移らんとする際、一士官より日本刀を借用せり、而して閉塞船退去の時之を以てポートホルの緊縛を切斷したるに端舟動搖の爲め圖らず其刀を海中に失せり。其後軍艦淺間に收容せられたる時、彼れ悄然として歸艦後刀劍を借受けたる士官に對して、其粗忽を謝せん様なしと告ぐ。余笑て曰く、憂ふる勿れ、誰か此際卿等に物を貸與して其返却を期待する者あらんやと。彼れ乃ち漸く安堵せるもの、如くなりき。森永中尉、余に告げて曰く、彼は終

始元氣を以て總員を率ゐ、船務を整備せり。退去の際にも負傷せる田中信號兵曹を負うて艇中に飛び込み、艇内漸く満水して到底進行の見込なきを見るや、彼右側の已に沈没せる僚船を指して、彼船に至り端艇を拾ひ來りて乗り移らんと云ひたれば、想ふに彼船も亦已に破壊せられ居ること明なれば、拾ひ來るも其の効なからんと諭したるに、彼も漸く思止まりたり。かくてそれより少しく進む程に左側に他の僚船が進航し來り盛に砲撃せらるゝを見るや、彼又「我等に一端艇を流し呉るゝ様彼の僚船に告げん」と言ひたるも、彼の僚船今や一意閉塞行爲に餘念なし、言ふとも其効なからんと諭したれば、彼遂に止みたりと。

△二等信號兵曹田中太郎吉 信號兵曹として伎倆卓越せるのみならず、性溫厚寡黙、而かも穎悟にして諸種の學術技藝に通ず、平素職

務に忠實にして前兩回閉塞の際より熱心に此舉に加へられんとを志願せり。されば富士艦長及び航海長も大に彼を信任せられ居たりと聞けり。今回の行動中、彼は常に熱心着實を以て働き、舵機等に一の故障なかりしは、全く彼の努力に依れるなり。其敵彈雨注の下に在て操舵するや、自若として平素の態度を變ぜず、爆裂彈片彼の下腿を挫ぐに及び、流石に剛毅の彼も直立する能はず、徐ろに指揮官に「負傷しました」と申告して、後悠然と其處に横はれり。退去の際も重傷を負ひながら艇中に在て平然漕撓せるが故に、一時中尉をして其微傷なるかを疑はしめたりと云ふ。

△一等水兵森下淺次郎 彼は沈着にして又學術に長ず。殊に水兵として水雷術の特別練習を卒ふ。遠江丸に乗組むや、専ら爆發裝置を擔當し、熱心に其電纜等を保護整頓し、因て以て爆發行爲を遂行

するを得しめたり。航海中操舵を掌らしめたるに、極めて能く針路を保持し、余をして窈かに其伎倆に敬服せしめたりき。斯かる好水兵の不幸にも行衛不明となりたるは、實に遺憾の極といふの外なし。彼遠江丸出發の當日甲板上に左の一首を書き遺せり。素より詩にはあらずれども、其意氣如何を見るに足るべし。

天佑塞得旅順口、露帝感慨將如何、

忽起日本萬歲聲、月傾西未止砲火

△二等水兵坂上宗次郎 幾多良好なる水兵中彼れが如く勇壯快濶に、彼れが如く熱心忠實に働く者、蓋し稀なり。彼れ遠江丸に乗組むや否や、其分擔の業務は勿論、其他の萬事に關し勞働周旋到らざる所なし。余彼れの疲勞を氣遣ひ、戒めて曰く、船務概ね整備せり、子等少しく休養せよ、主要の時機に至りて心身疲勞あらんと。彼れ

答ふらく、請ふ、幸に意に介する勿れ、聊かも疲勞を覺えざるなりと。尙ほ晝夜を別たず、勉勵すること依然たりき。而して彼は機砲に配置せられたるに、敵彈漸く飛來するに及び、踴躍自ら禁ずる能はず、最早機砲を發射して可なるやを問ふ。然れども射程未だ近邇せざるが故に、暫時猶豫せしめ居たるに、次て敵彈其附近に爆裂して機砲を破壊せられ、彼は面部に負傷せり。彼れ負傷せるも元氣少しも變らず、手早く繃帶を施したる後再び活潑に動作しつゝありたり。中尉の言によれば彼は常に云へり、我は素より決死生還を期せず、然れども此日本刀は分隊長が我に授けられしものなれば、此刀丈けは誰れか生存する者、之を持歸りて分隊長に返却せられたしと。彼れ頭部に重傷を負ひながら、その兵器を携へて平然撓漕せり。中尉側に在りて撓漕を助けしも、彼は尙ほ部隊長を煩はさざるの決心

を示せり。又一同の水雷艇に收容せられたる後、余は艇内にて治療を受けつゝある負傷者を見舞ひしに、彼は余が衣服より海水の滴るを打眺め、側より袖を引きて、指揮官此濡れたる服を早くお脱ぎなさいと忠告する杯、宛かも自身の重傷を知らざるものゝ如し。

△二等水兵中村市郎兵衛 彼は伶俐機敏なる水兵にして、熱心職務に従事せること敢て他の水兵に譲らず。其森下一等水兵と軍艦八島より相携へ來れるを以て、常に森下と事を共にして動作しつゝあしが、終に結局に至るまで相提携して共に行衛不明の數に入りしこそ、遺憾千萬と云ふの外なけれ。

右の外機關部員に關しては、前述せるが如き事情あるが爲めに、未だ精細の所見を記するを得ず、猶ほ他日調査を了へて後、更に之を陳述せんと欲するなり。

これ、第三次旅順口閉塞の際、閉塞船遠江丸の指揮官の任にありたる、海軍少佐本田親民氏の手記になる。閉塞當夜の光景、寫し出して眞に逼る。名譽ある勇士の功績と共に、此文永く世に傳へられん。

▲砲の達する距離

(肝付少將の談話の一節)

大砲の達する距離は共に三海里といつて、領海權を之に限つて居つたが、千八百八十三年に英國の海岸シユベレネスで試験した事があるが、此地にマウントブランドといふ我富士山より高きと三十呎なる一萬五千七百八十一呎の高山がある、口径九吋二なる二十七噸砲に三百八十斤の丸を以て平地から撃つた所が、此高山より五十呎を通り山の向ふへ落ちた、發射地より落ちた所まで徑千二百六十三碼即ち百七十八町十九間九で、即ち五里約(十二哩百四十三碼)であつた。砲彈はウネつて行くものであるから、四十五度角が一番遠く行くので、此時も之をやつたのである。

○小笠原中佐の海戦談

(前略) これから第二回と第三回の閉塞の時の逸事を一つ二つお話をしやうと思ふ、是がやはり強壯なる身體の賜物であると思ふ例になる、此事をお話するにはどうしても旅順の圖を描いてお話しなければ分りませぬ。(圖解) 此處が旅順の口で、左側に在るのが黄金山の砲臺、右側に在るのが威遠砲臺、其他いろいろありますが、近くのは此位な砲臺であります、此口を塞いでしまはうと思ふ、これを前後三回やつたのでございます。初めの時には十分にいきませぬで、僅に二艘の船が口元まで行つた。二度目の時にはほんゝ成功せんとして僅に間隙をのこした、二度目の時にはかう云ふ風になつた。(圖解) 千代丸に福井丸、彌彦丸、米山丸とかうなつた。此米山丸がモウ少

し中央へ來ると丁度宜い所へ行つたのでありますが、不幸にして中央まで來た時に、敵から撃つた彈の爲に蒸氣罐を破られて蒸氣が漏れた、それで急に停めて後方へ退らうとしたがそれが利かなかつた、あなた方が駆けて來て急に身體を停めやうと思つても中々停らないと同じことで、一萬噸以上の船が走つて居る時には、機械を停めてもそれから確に三海里ぐらゐは惰力でもつて進むものです、さう云ふ時には仕方がありませんから後進を掛けて後方へ退つて、自分の思ふ位置に停まる、かう云ふのが船を扱ふ方法です。ところが此時には丁度宜い所へ船が來ましたから、停めて後進を掛けやうと思つたところが、今お話しする通り敵の砲臺から撃つた彈丸が生憎罐を破つたものでございますから、蒸氣が漏れて停めても旨く停らず、況んや後方に退るとがてきなかつた。仕方がないから錨を二挺打込んだ、

けれども二挺の錨を引きつゝ船は左方へ寄つてしまつて此間へ沈めることになつたのでございます。此米山丸と云ふ即ち一番好位置まで行つた船を指揮して居つた正木大尉と云ふ人から、私のところへよこした手紙の中に當時の事が書いてありますが、其中にかう云ふ事が言つてある、『十人の機關兵は二直になつて一晝夜半、二人の兵曹は二人交るゝ船を執りて一晝夜半働き續けた、而して自分等が運送船に乗移つた時は殆ど運送船の中を住ひにして、旅順の口へ向つて進みつゝ行つた』其時には澤山の兵士を乗せて行くのでございませぬから、四時間起きては四時間寐ると云ふやうに交代して二直でやつて行つた、其二直の非番直に當つた者には成るべく休んで居れと云ふことを言付けた、然るに其時に休まないで種々の仕事をしたり、又マントレットを造つて居る、此マントレットと云ふのは彈

日 露 海 戦 談

日 露 海 戦 談

丸を防ぐ楯のことです。それは丸太なら丸太を船の中へ横へて、これから非常に大きな網を丁度繩暖簾のやうに垂し掛けて、之に細い網をからげたものをいくつも船の中へ拵へる、さうして敵の彈丸が破裂をしても、このために防いで割合に負傷をする者が少ない、それを皆造つて居つた。そこで指揮官が何故か前方は休ませぬか、是から非常な働きをするのであるから、休み得るだけは身體を休めて置く方が宜いぞと言聞けた、ところが何と言つて兵士が答へたか、私共は代り合つて休めますが、指揮官は始終艦橋即ち號令を掛ける所に上つておいでになるではありませぬか、あなたが休みなさらないのに私共がどうして晝寐などができませうと言つて答へた。さうすると指揮官が、それはいけない、自分は船の上に居るが、先に行く船を見失はないだけの役である、別に身體を動かすと云ふことは

しない、お前方は非常な勞力をやるのであるから、成るべく身體を休めろと言つたが、一人も休んだ者が無かつたと云ふので、大いに感じて居る、是も能く考へて見ると、若し中に身體の弱い者があつたら、幾ら我慢をしても、指揮官が始終起きて居るから自分等も起きて居て働かなければならぬと思つても、身體が弱かつたら是は堪えない、故に是も平常よかんの衛生が行届いて身體が強健であるから、四時間働いてあとの四時間休む時間にも續いて働くことができると思ふのであります。(中畧)

それから尙ほ米山丸についての話があります、これは新聞にも出しましたから御覽の方もありませうが、此米山丸に機關砲を一つ載せて居つた、機關砲と云ふのは小さき鐵砲を四つ列べて、一つの機械に附けてある、其上に箱を載せて箱の中には彈丸が澤山入つて居る、

さうして手が付いて居つて、此手を前後すると彈丸が澤山に撃出せる、しかしこれは今さら効力が無いと云ふので餘り用ひて居りませぬが、兎に角敵の港に向つて進んで行くのであるから、少しでも敵に損害を興へるのが利益であると云ふので、之を載せて置いたが、此鐵砲を發する役に連れて行つた一人の下士官がある。此事は教育の會などへ行ても能くお話しますが、殊に御婦人のお方に聽いて戴きたい、それは兵士の舉動である、士官はさう注意をして戴かないても宜いと思ふ、何故と云ふに特別に學校へ入つて種々の訓練を受けて出て來たのでありますが、兵士の方はいきなり飛込んで來る、此頃毎晩のやうに澤山提燈行列にやつて來ますが、殊に一昨々日(六月一日)でありましたか、日本橋の魚市場の人達が晝間旗行列でやつて來ました、これを私共が見て居りますと、半被はらひを着た人もあれ

ば、或は白足袋の跣足の勇肌の人も居れば、或は麥藁帽子をかぶつて居る人もあり、いろいろの人が來たが、それを見て一種の感に打たれた、あゝやつて魚賣をして居られ、或は八百屋をして居られる人が、一と度軍隊に入つた三箇月なり四箇月なりの訓練を受けると、即ち今新聞に出て居つたり或は公報で見る如き立派な舉動をするのであつて、即ち兵士の舉動と云ふものは直ちに國民の觀念を代表して居るのです。士官の方は特別の教育を受けて居りますが、詰り兵士の立派であると云ふのは、即ち其國民の觀念が立派であるから爲であらうと思ひます。特に國民の平素の舉動と云ふものは、是から家庭教育の主人公となられる御婦人のお方は能く御注意を願ひたいと思つて居ります。それで今お話を仕掛けた米山丸に連れて行つた下士官は、平生極めておとなしい男でございます、それであるから

所謂人の強^{いほゆる}弱^{きやうた}、即ち彼人は強いとか或は弱いとか云ふやうな事は輕々しく批評の出来るものではないと思ふ。其人^{そこ}が死を決して其處に臨んだ時の觀念と云ふものは、なか／＼其位置に臨まない人がチヨット位考へて批評の下し得るものではないと思ふのである。其米山丸へ連れて行つた下士官と云ふのは、平常一同から「女々^{めんなく}」^いと言はれて居つた、殊に艦内第一の親孝行と云ふ評判の男であつた、それに正木と云ふ指揮官が目を着けて、それを撰抜して特に一番困難な鐵砲を撃つ役を言付けた、それで愈々港の口へ近づいて、是から鐵砲を撃ち始めると云ふ號令を掛けて、其撃つ時の様子を見て居ると、少しも慌^{あわ}てることなく平常の通り沈着の態度を保つて居るが、其勢ひは夜叉^{やしゃ}の如き有様を現はして撃つたさうです。其撃つて居ります中に敵から放つた彈丸が破裂をして、兩方の足と腕と三箇所撃

小笠原中佐の海戦談

一〇四

たれた、それでも屈せずによつて居つた、其中に敵の彈丸が艦に當つて中の蒸氣が漏つて、旨い工合の所へ船が行かないから、錨を急に投込まなければならぬので、指揮官は其男に向ひ、お前は鐵砲を止めて錨を投込めと云ふことを命じた、「ハイ」と言つて錨を投込んだ、さうすると其次に水の深さを測れと言付けた、それは幾らの深さであつたと云ふことを指揮官が知つて居らねば、其閉塞は果して旨く行つたかどうかと云ふことが分らない、深過ぎる所でやつたならばそれだけの効力は無い、それで船を沈める所の深さを測れと云ふことを言付けた、これなどは餘程落付いて居らなければできない事であります、然るに其兵士はチャンと深さを測つて錨を投込んだと報告を爲し、端艇に乗つて出やうとする時に、敵の彈丸が飛んで来て左の頸部を撃たれた、丁度合せて四箇所の傷を負つた、それに

も拘はらず遂に櫂を取つて五海里の間漕ぎ通して收容船に收容された。收容されてからは殆ど一時絶息したさうでありますけれども、是は仕方がない話で、四箇所傷を負つて居るのである、是等は身體が強壯でなければ、幾ら精神が強くつても身體は續かぬです、それで正木と云ふ指揮官が大層感心して、昔の人が忠臣を求むるは孝子の門に於てすと云ふ事を言つたが、實に此言葉は自分を欺かなかつたと云ふ事を言つて居ります、さう云ふ立派な舉動をした下士官があるのです。

それからモウ一つは其米山丸に乗つて居りました信號兵です。信號兵と云ふのは指揮官の側に始終附いて居て、さうして指揮官の號令を傳へたり、或は旗を揚げたりする役である、此者に正木と云ふ指揮官が面白い事を命じた。それは船が沈没するまで敵の彈丸が幾つ

當るか勘定をして見ると言付けた、何故さう云ふ事を言付けたかと云ふに、若し生きて再び艦隊に還ることができた時には、非常に大いなる参考になる、何時間の間にも敵の彈丸が幾ら當つたと云ふことが分ると大いなる参考になる、それで其信號兵は彈丸が一つ當ると一つ、二つ當ると二つと勘定をして、港の口へ行つた時に三十九發まで勘定をした、さうするとモウ港の口では諸方から彈丸が當りますから勘定がしきれなくなつた、そこで指揮官に向つて、モウ確かな勘定はできませぬ、三十九發までは勘定をしましたが、それから先は百發當つたか百五十發當つたか勘定はできませぬと言つた、其途端に敵から來た彈丸で右の足を撃たれましたが、さほどひどい傷ではなかつた、ところが其側に居つた中尉が重傷を負つて倒れた、すると其信號兵は自分の足に傷を負つて居るのも打忘れて、其重傷

を負うた士官を抱上げて高い所から下へ降りたのです。下へ降りてそれを正木大尉に渡し、正木大尉はそれを抱えて端艇の中へ乗移つたのであります。是などは何でもありませんけれども、日本の兵士が如何に高尚な觀念を有つて居るかと言ふことが分るので、自分が傷を負つて居るのも忘れて、自分の上に立つて居る士官の身を大切に思つて、其己れの身の危いことなどは顧みず、それを抱えて下まで降りると云ふのは、所謂日本國民が如何にも高尚な觀念を有つて居るといふことを證據立てると思ひます。其次に第三回閉塞のお話しをしますが、これは皆さんも御承知の通り實に悲惨な状況を呈したので、八艘行きました船の中遂に四艘は一人も戻つて來ないので、即ち生死不明の者が八十八人ある位です。是が一番ひどい有様を呈したので、此時のお話しをします。

(圖解) 此前の時にはかう云ふ風にやりましたが、三度目の時には米山丸などの沈んだ所へ防材と云ふものを敷いた、防材と云ふのは船が入つて行けないやうに彼方でもつて遮りを置くのです。それほど云ふ事をするかと云ふと、是にもいろいろ式がありますが、多くは二間三間ぐらゐの丸太を列べるのです、さうして三通り位穴を開けて、細い針金を以て縛つた太い鎖を之に通ずるのです、さうして其上を又太い麻繩でからげて、諸所へ錨を投込んで保たしてある、さう云ふものをこゝへ置いた、ところで其夜は南風が強く吹いて居つた、南と云ふと沖の方から港の口に向つて風が吹く、さうして非常に波浪が高いからして、此時閉塞をやつても還つて來ることができまいと云ふ懸念からして、其時の指揮官が之を中止しやうとしましたけれども、命令が届かずして遂に行ふことになつてしまつたので

す。其時に一番先に行つたのが三河丸と云ふ船で、是は二箇所の防材を突破つて中へ入つてしまつた。それから其次に遠江丸と云ふのが進んで行つて、防材に突掛つて横に曲つたらしい、それから小樽丸に江戸丸、佐倉丸と云ふのがこゝに列んで、此處に朝顔丸と云ふのがあつて、少し離れた所に仁川丸と云ふのがあつて、かう云ふ風になつた、しかし是は私の想像です、新聞にも出して置きましたが、新聞の想像です、なぜ想像かと云ふと、此小樽丸と相模丸と佐倉丸と朝顔丸と云ふ此四艘は一人も還つて來ない、それ故何處々々へ沈めたと云ふことが分る筈はない、唯是は其時に行つた他の船の人から聞いたのと、あとで種々の方面から來た報告を綜合して見て、こんな風であるまいかと私が唯考へただけでありまして、實際の事は分りませぬ、しかし此四艘の人は一人も歸つて來ないので、それで

其時に一番奥へ入りまして三河丸を指揮して居つた匝瑳と云ふ人がよこした書面があります、之を見れば閉塞の如何に困難であつたかと云ふ事が分りますから、之を讀んで見ませう（中略）三河丸は一番先に行つたものであるけれども、乗つて居る當人は其當時知らない、自分の船が先に居るか後に居るか分らない、ところが港の口で鐵砲の音が始まつた、それはあとから考へると收容しに行つた驅逐艦に敵の砲臺から撃つた彈丸ですが、それを他の運送船が最早入つたと思つたのです、即ち三河丸に乗つて居る匝瑳と云ふ人がさう考へた、そこで自分の船も行かうと思つて港の口に向ふと、其時に、『恰も味方水雷艇の來るに會ひたれば、閉塞船は港口に沈みたるやと尋ねしに、汝は先登第一なるぞシツカリやれと云ふ答を得たり、………（中略）』

日 露 海 戦 談

日 露 海 戦 談

かう云ふ事が書いてある、匝瑳と云ふ大尉が傍らへ信號兵を呼んで、（前に御話をしたのは別の、他の信號兵です）、愈々近くなつたらそこで投錨をしろ、爆發をしろと云ふ事を言付けるが爲に、口へ「メカホン」と云ふ遠方へ聲をやる器械を付けさせて居つた、さうして呼子の笛を挟んで肩へ手を掛けて居ると、何か母指の頭へ當つたやうな氣持がしたと云ふ、すると側に居た信號兵が、航海長やられたと言つて倒れた、見ると自分の笛の口を彈丸が曲げて咽喉を貫いたので、立派な兵士であつたが惜しいことにやられた、即ち一言を記念に遺して遂にかう云ふ最期を遂げたのは氣の毒であると言ふ事が書いてありましたが、しかし此時に非常に幸ひな事があつた、何故かと云ふと此三河丸が防材に向つて突込んで行く時に、諸方から撃つ彈丸が彈丸の天井を造つたと云ふ程に澤山に撃つた、彼方も

今度は防材を敷設し、砲臺からは盛んに撃つし、其外水雷が敷設してあつた、それが幾つも破裂するので其水が船體に當るから、彈丸の爲に起つた火が其水の爲に消えてしまつた、かう云ふ事を以ても水雷と彈丸の爲に如何に苦しんだかと云ふことが分るのであります、其處の事が書いてあります。

こゝに又面白い事があるのです、三河丸が沈没に行く前に、本艦から皆撰り抜いた勇士が行つた、其時にかう云ふ事がある。

『三河丸に移りたる後は日々罐詰牛肉ばかりであるから、大尉は兵士をねぎらはんが爲め、船内を搜索して漸く鶏數羽を得て之を兵士に與へしに、誰一人進んで鶏を料理せんと云ふ者なかりし故、余も強て殺せとも言はず、遂に一羽も殺さざりしのみか、十分に餌を與へ、上甲板、艦橋、其處此處の嫌ひなく自由に飛歩かしめ

飼放し置きしが、爆發の後は何れせしや、自分等も何れ今日か明日の中死するものと思へば、妙な所に同情心慈悲心起りて、一羽の鳥さへ無慘に殺すに忍びざりしなり』

かう云ふ事が書いてある、これなどは一體慘酷と云ふ事と戦争と云ふ事に就て研究して見たら、一種の趣味が出て來るだらうと私は思ふのであります。

それから今の匠差大尉が沈没を終つて歸つて來る時に出會したのが佐倉丸です、かう云ふ事が書いてある、

『港外に出てよりは成るべく砲火に觸れざるやう……(中略)沖合に居て砲火を受くことも緩くなりたれば、總員に軍歌を歌はしめ、諸勇士の萬歳を叫ぶ聲を聞つけて、其方向に進みたり』

と云ふ事が書いてある、其佐倉丸に近頃やかましい白石少佐が乗つ

て居つたのです、此白石少佐の事は私が此方へ上ります一時間ばかり前に、淺間に乗つて居ります少尉候補生の一部から、白石少佐其時分の大尉が船を出る時の事を精しく書いて私の所へよこしました、それを今新聞記者の方へ渡して置きましたから、多分明日の新聞へ出ると思ひます、それを御覽になれば分ります、其白石少佐は淺間艦長の八代大佐から、少尉候補生少尉あたりの精神的教育を與へて居つた、此人は御承知でもありません、三十三年に太沽たかの砲臺に一番乗をやつて、各國軍隊の間に日本の勇士として知られた人でありましたが、其後或る事情の爲にひどく自分で自分を奉ずると云ふことやつた結果、昔は勇武一徹の人でありましたが、此頃では非常に温厚な人になつて居りました。私は或る事情のあつた時に多少相談を受けたことがあつて、殊に懇意にして居りましたが、人間が一變し

日 露 海 戦 談

日 露 海 戦 談

たかと思ふやうに温厚になつて居つた、しかしながら内に燃えて居る活氣と云ふものは、砲臺の一番乗をやつた時より、より多く近頃燃えて居つたことと思ふ、と云ふのは今度出ます前に、即ち明日から新聞に出るのを御覽になれば分りますが、少尉候補生を集めて言つたことがある、自分が閉塞に行つた時は、敵の砲臺を乗越さうと思ふ、かう云ふ事を言つて居つたさうです、それが一人も歸つて來ないと思ふのは甚だをかしいのです、これがボートが途中で顛覆したとか、或はボートに乗移れなかつたとか云つても、一人や二人其中で助からうと云ふ考を有つて居つたならば、必ず收容船に收容されるに相違ない、それが一人も歸つて來ないのはをかしい、と云ふのは白石はかう云ふ事を言つて居つた、自分は思ひきつた事をやらうと思ふ、併し是は無理に命令はしない、自分が連れて行く者が一同

同意をしたならば、其事を行ふ積りであると云ふ事を言つて居つた、此間も八代大佐の所からかう云ふ事を手紙の中に書いて來た、白石の告別は簡單であつた、艦長から受けて居つた御教訓を能く守つて本分を盡す積りてあります、確かに淺間の武勇を揚げると云ふ事を言遣して行つた、然るに白石も歸つて來ず、其他の者も一人も歸つて來ない、余は今も尙ほ彼等を待つと云ふ事が手紙の中に書いてあつた。それを以て見ても必ず一同と約束をして、さうして其同意を得て或る非常な激しい事を、四艘の人等は皆やつたのではあるまいかと私は思ふのであります。あなた方も御承知でありませう、露西亞から來ました報告に、日本の或る將校は海戰史が始つてから類例の無いやうな果斷の事をやつたと云ふことが書いてある、他の報告は黄金山に二十人の日本の兵員が斬込んで、十二人は斬死してアト

の八人は力盡きて生捕られた、又此方の威遠砲臺の方には三十人ばかりの兵士が斬込んで、是も或は戦死し或は生捕られたと云ふ事が書いてある。それから最も激しいのは港の中に甲鐵艦が一艘居た、其甲鐵艦へ日本の人が三人行つた、士官が一人兵士が二人行つたさうです、さうして其士官は先方の士官を一人斬つて、自分は重傷を負つて倒れて生捕られた、それに附いて行つた兵士は何も持たずに奮闘して遂に生捕られたと云ふ事が書いてある、或は今日彼の多數は力盡きて生捕られて居るかも知れませぬ、けれども是は實に名譽の話であつて、寧ろ死するに勝る立派な舉動をしたものであらうと思ひます。

さう云ふ激しい舉動の出来るのはどうして出来るかと云ふ事を一つ研究して見なければならぬ、成程精神と云ふ必要もあらう、けれども

精神と同時に身體が壯健でなければ出来ぬ、既に朝顔丸に乗つて居つた一人の死體が沖に浮いて來たのを拾上げて見た所が、小銃の彈丸を八つ受けて居つた、それから大きな彈丸を二つ、合せて十の彈丸を受けて居つた、兎に角海の中へ落ちる前に此傷を受けたと見なければならぬ、それは精神と共に身體の壯健であると云ふ事が非常に必要であつて、即ち丈夫の身體には丈夫の精神が宿ると云ふことは争ふべからざる事實であらうと思ひます、(大日本婦人衛生會に於て)

▲グイクトリー艦上の信號

England expects that every man will do his duty.

○嗚呼白石少佐

言ふ事は易く行ふ事は難しとは先哲が口を酸くして語り筆を秃して書きたる事にて眞に言行一致したる人は古來甚だ稀である。滔々たる懸河の辯を振ひて議論に巧なる人も、尙ほ其十分の一の實行も出來ぬが常であるを見れば、如何に行ふ事の難さか判る。世の如何なる職業に従事する人も言行一致は必要なれども、殊に軍人に於て尤も大切である。而して終始一貫能く其思ふ所を云ひ其言ふ所を實行したること白石少佐の如きは蓋し稀なり。

少佐姓は白石、名は葭江、柴田は其本姓である。明治六年に生る。後故有て白石氏を襲ぐ。夫人名は千代子、白石氏の出、一子あり豊雄といふ、正に是れ少佐が唯一の忘れ遺身である。

嗚呼白石少佐

一三〇

元來少佐は至て寡言の人で、艦内に在る時も格別高談放論せられると云ふことはなく、人々の面白き話を聞かれてアハア……と笑はるゝのみであつた。けれども何事か語り出される時は何時も極めて眞面目で而して熱心に語られたゆゑ、時としては人の言ふ言葉も耳に入らぬかと思はるゝ程であつた。而して何人も却々眞似の出来ぬは、少佐は自身に必ず行ひ得ると信ずることでない限りは、無暗に壯語を吐かれぬ一事である。これは何でも無いやうであるが、興に乗じて嘶などする時に、餘程先々を省慮した人でなければ出来ぬ事である。殊に我々の深く感服する所は、日常の談話に於て人と意見を異にしたる時にても、決して人と論争せられたことのないのである。意見が違へばそれまでの事、君は然か思へ自分はかく思ふといふ風にて其儘黙された所は、餘程自信力が強く且つ冷靜なる頭腦を有つて居

られた事が分る。

古來武を以て成る我國も、王政復古の後は歐亞の文物を迎ふるに急にして武を練るに暇なく、我國特有の武士道の次第に類れ行くは心あるものゝ窃に憂ふる所、淺間艦長八代大佐の如きは最も熱心なる武士道の鼓吹者で、常に此事にのみ苦慮し居る程の人なれば、昨年九月中旬吾々が少尉候補生として始めて本艦に乗艦したる時、艦長は將に吾々一同に訓諭せらるゝに方り、特に白石大尉を以て諸子の指導官とせる所以のもの、他なし其勇に肖らしめんが爲めなり。百折不撓の忍耐は勇より出づ、百難を排除して眞に國家に盡さんとせば勇氣なくしては遂げ難し、白石大尉の如きは是なり。氏は北清事變の際歐亞列強の間に在りて、能く我國の武勇を世界に示したるの人なりとの語を以てせられた。白石大尉が眞に我國武士の眞髓たる沈勇

嗚呼白石少佐

一三一

あるにあらざれば、何ぞ此汚濼々地の艦長をして此言をなさしむることが出来やうぞ。日清役の勝利は我國が世界の舞臺に雄飛する三番叟で目出度舞ひ納めたにも拘はらず、歐人に何時迄も黄色人種を侮る心の先入主となり居る爲め、日本の強さにあらず餘りに清國の弱さを爲めなりとて、世界列強の番附面に肩を列べて書き加へない。恰もよし去る三十三年清國に團匪の徒蜂起し事漸く騒がしくなれば、利害相關する英米佛獨さては伊太利に至るまで、各兵を出して支那を攻むることとなつた。勿論利害共に最も直接に關係ある我國なれば、我もまた兵を出すこととなり、當時軍艦鳥海の分隊長なりし大尉は、總指揮官服部中佐の下に海軍陸戰隊の中隊長に轉じ北清に向はれた。此陸戰隊は佐世保海兵團の兵員より編制したもので、素より平常訓練はしてあるけれども、急卒の編成のことにて中隊長は未

だ下士卒の姓名や各人の性質をも明に知らぬ。此兵員を率ゐて歐米列強の聯合軍中に伍し我武勇を顯はすは甚だ責任の重いことで、此部下を以て能く果して我國威を揚ぐる事が出来るか否、何しても此千載一遇の晴れの場所に我武勇を輝かさねばならぬのである。是れが白石大尉の最も苦心焦慮せられたところで、北清に上陸するや否直に部下を集めて「此度の變亂之を平ぐるは素より我に於て誠に易々たるのみ、唯之のみに満足すべきにあらず、我日本軍は歐米列國の上に擡づる一段の武勇を顯はして、我國威を世界に示さねばならぬ。此場合に吾々軍人は實に我身にして我身にあらず、我大日本を代表する事を忘れてはならぬ。我等は此大任を負ふものなれば各自同心協力せよ。若し汝等にして我命に背き躊躇する者あらんか、唯此劍あるのみ」と嚴重に云ひ聞かされて二三日の間陸上に種々の

操練を行ふた。果して氏の隊は全然見違へる程に規律正しく整ひたる軍隊となり、大沽砲臺攻撃の際はさしにも世界に名高き列國の軍隊さへも容易に進み兼ねたるをモドカシク思ひて、我軍隊は獅子奮迅の勢を以て列國軍を追ひ越して砲臺に肉迫し、遂に砲臺占領の先登をなし、我國旗を砲臺上に樹て、日本武士の眞價を示し、歐米の軍をして耳目を聳てしめたのである。此有形の價值と共に、無形上我國威の宣揚せられたることは實に非常なものである。我等は國民と共に多大の感謝を同氏に拂はねばならぬではないか。大沽砲臺攻撃の日、名譽の戦死を遂げられたる故服部中佐の銅像は、今や佐世保軍港水交社支社の傍に武装の姿凛乎として停立せられ、行人をして轉た往時を追懷せしむ、此銅像建設は白石大尉が凱旋後企圖せられたので、同僚中にも其失敗に終るべきを説き、或は坂元少佐の像

日露海戰談

さへも未だなきにとの意見を持つものさへありたるも、氏は故坂元少佐の像なきを以て中佐の像を憚るの理由なしとて、一誠必ず成功を期し東奔西走遂に此銅像を見るに至つた。後少佐は常に人に向つて、各位の非常なる盡力によりて建設し得たるは深謝する所なりと語られた。北清の變一に其功を故中佐に歸し、先人を追慕して永く記念を留めしめたる其心事の高潔なる、宛然古武士を偲ばしむるものと云はねばならぬ。

北清の事終へて後ち暫くして、少佐は海軍大學校選科學生となり研究に餘念なかつたのも東の間で、日露の風雲漸く急になると共に昨年の七月本艦分隊長に補せられた。其後は前にも記した如く、艦務の外には我々候補生を指導する任に當られて、孜孜として一日の如く聊も倦むことなく、能く其職に盡され且つ頗る熱心に吾々を指導

日露海戰談

せられた。

かつて候補生の乗艦するや、之を集めて謂つて曰く「君等は今より將校として部下を率ゐ己の命ずる所を充分に實行せしめねばならぬ。先づ部下兵員の姓名を暗記し、能く其性質を詳知するを要す、是は指揮官たる者の第一の義務である。何等にても十分に自分に行ふ事が出来且つ仕事の順序を能く呑み込みて居らねばならぬ。己れ先づ其技に熟し居らざれば、能く部下をして心服せしむることは出来ぬ。且つ職務は最も嚴格に行ひ己れ自ら模範となりて部下に示すは肝腎なる事なり、君方之を力めよ」と。又「軍紀は甚だ紊れ易いもので、殊に軍艦上の生活は、士卒共に狭き艦内に朝夕起臥するから、自然公私混合の弊に陥り易い、之を平民主義などと誤解してはならぬ、勿論或る程度迄は士卒相共に親しむの必要あれども、狎るゝに至つ

ては上に威信なく、下に服従の心がなくなる、故に軍務に關しては一片の私情を挟むことなく、唯我は國家の軍人なりと云ふ觀念を以て事に當らねばならぬ」と、常に候補生を戒められた。實際少佐は終始此心を以て實行を期して居られた。本年正月元旦の朝艦内に遙拜式を終り、艦長は總員を集められて明治三十七年は我國が當に世界に雄飛すべき曙光なることを訓諭せられた後、少佐は我分隊の兵員を前部上甲板に集め、さてこゝに目出度新年を迎へたり。汝等と共に花々しく討死すべき戰場たり又墳墓たる此前甲板に於て言ふべきことあり、(こは前甲板は同少佐の指揮する前部主砲々臺のある處なるが故にかくは言はれしなり)其大體に於ては最早艦長の御訓示に依り悉く盡せり、殆ど言ふべきことなし。我分隊は昨年以來一同頗る健康にて一人の入院せしものなく、又今日まで一人の犯罪者をも

出さざるは諸氏協同能く命を守れるの結果此名譽を得たるなり。是れ深く私の謝する所、尙ほ今後も十分に身體の健康を保ち將に來らんとする國家の大事に遭ふの時、義勇奉公の職に盡されんことを望む。軍艦にして病む者多く虚弱ならんには、如何なる堅艦巨砲も何かせん。實に戰鬥の力を殺ぐものは病なり、汝等能々之に注意せよ」とて諄々説き出でられし事あり、少佐は健康といふ事には最も重きを置かれた人で、自身にも體育は最も力めて居られた。それ故に身の丈は中位であつたが、骨格は非常に逞ましく、筋肉は太だしく發育して、全く永の月日噫くや一つしなかつた程で、見るからに壯健なる風采であつた。

日露の風雲甚だ急を告げて來た本年の一月中頃、新任の吾々少尉連中が少佐に防寒服の準備を相談した時に、僕等は北清の寒氣も經驗

して居るが、ナニに壯いものは元氣さへよければ何でもないよ。殊に僕などは二月一杯の命だから、格別防寒の支度はいらぬ」とて敢て意に介して居られなかつたやうだ。此時少佐は胸中既に一死奉公を決して居られたものと見える。間もなく開戦となるや二月九日の仁川の戦に、ワリヤーグを瞬間に撃破して戦の血祭りをした功勞は、少佐及び部下の砲員與つて大に力ありと云ふて可なりだ。其後浦鹽斯ウラジネスト德に我某艦隊の出征した時、淺間も之に加はつて居たが、某少尉が分隊の事務を調べて居るのを見て、少佐は之を留めて「事務は歸途に於て爲すも遅からず、戦に臨む前には唯専心戦ふ事のみを考へ、工夫を凝らしよく武器を檢めよ、故障は必ず無しと信じても時に臨みて不意の事起らば不覺を取らん。古の武士を見よ、試合に臨み先づ目釘を潤すを、何人も目釘の抜けるが如きものは佩し居らざれど

も尙ほ斯くの如し、是ぞ真に武士の心懸くべき用意なり」と、其注意の周到緻密なる實に心服の外はない。

「軍人は決心が最も必要だ決断力がなければ事に當つて躊躇する」と常に云うて居られた。是は誰しも言ふことで而して中々行ひ難い事であるが、少佐は實際かうと決心せられたらば初志を翻へさない性質であつた。又常に「敵の砲火を防ぐ我唯一の装甲は我の砲火である、我の砲火にして技量熟達し能く命中せば、如何なる敵も恐るゝことはない。殊に此一發の弾丸で必ず敵艦を打壊はして遣ると思ひ込んで誠心と共に全身の力を込めて打てば、必ず敵に勝つ事が出来る、是は心的作用だ」と云うて居られたが、所謂虎と見て射れば岩をも透すといふ理を説かれた事で、軍人の赤誠と決心はかくありたいものと吾々大に悟ることを得た。第一回旅順港口閉塞の擧ありし

後「廣瀬少佐は敵の驅逐艦を分捕て乘て歸て來ると云はれるし、正木（白石大尉と同級生にして、閉塞船米山丸に指揮官として壯擧を遂げられし勇士正木大尉の事なり）は港の中まではいり得られたら、船渠に船を打附けて壊はして遣ると云ふから、僕が行けば砲臺の中へ斬り込む」と語られた事がある。第三回閉塞の擧あるに及び少佐は佐倉丸指揮官として、本艦分隊長機關少監寺島貞太郎氏は同船の機關長として、同じく本艦選出の勇士九名を率ゐて四月三十日に乗込む事になつた時に、八代艦長は前回閉塞の擧とても疑ふにはあらねど、此度こそは立派に成功すべきを確信すれば、充分に日本武士の花を咲かし、淺間の武勇を發揚せんことを望む旨を述べられ、去ぬる年布哇騒亂の際八代大佐が同地陸上の偵察に向はれたときに、子爵小笠原長生氏より特に贈られたる天女丸と名くる由緒正しき銘

劍を白石少佐に與へられ、同じく依田副長も短劍一振を同氏に贈與せられて壯擧の臆とせられた。少佐は「生も死も只天意に任すのみ。成功に先立ち不幸にして斃るれば是非もなし、生ある限りは只専念成功を目的とせん、幸にして成功せば是れ多年諸士より薰陶せられたる結果の顯はれたるなり」と答へて、萬歳聲裡に勇壯なる門出をせられぬ。其發する前に副長は何事か言ひ置くこと無きやと尋ねられたれども、用意は平素何でもなしあれば、時に臨みて格別の用意もなく又云ひ置くこともなし、之が平素よりの小生の持論なり」として何一つ言ひ置かれず、只同僚某氏に向ひ宜しく後を頼むとのみ平然として出發せられた。常に部下に言聞かされ居たる武士の用意は、實に少佐に於て始終一貫に實行され、此時に於ても能く模範と成つて居られる。實に得難く爲し難い心懸と云ふの外はない。越えて五

月三日の未明、閉塞を決行せられ、又砲聲の般々轟々たる所、雷火空に閃めき悽絶を極むる彈雨を冒して勇士の收容に従事せし驅逐隊及び艇隊には、閉塞船四隻に乗組める決死の勇士を收容せしも、佐倉丸外三隻の勇士は遂に歸り來らず、待てども待てども朝まだき闇を破つて敵が唯一の金城鐵壁と頼める砲壘に生きて還らぬ日本武士の數十名、劍逆手に滴る血汐を啜りて咽喉の渴を癒しつゝ、簇る敵を踏み除け蹴り除け痕を負ひたる獅子のごとく、奮進せる勇士は抑も誰ぞ。今も尙少佐の容姿は目前に髣髴耳底尙ほ少佐の訓言を聞くが如く感じ、永く指導教訓の恩を負うた吾々一同は、追慕の念禁じ難くて暫くも其溫容を忘るゝ間が無いまゝに、今迄の事を思ひだしてかくは書き綴りたれど、不文にして少佐の本色を發揮することは出来ぬのみか、却て玉を瓦の恐れあれば茲に筆を擱きぬ。

嗚呼白石少佐

一三四

白石少佐が軍艦淺間に分隊長の職を奉じて居られた當時、艦長八代大佐は同艦乗組少尉候補生指導の任を特に少佐に授けた。少佐は非常なる熱誠を以て蕭陶に與り、彼等に及ぼす所の感化も亦尠からぬのであつた。然るに、曩に第三次旅順口閉塞隊の擧あるや、少佐も閉塞船佐倉丸の指揮官として旅順口に赴きしが、終に往きてまた還らず、空しく行衛不明者の一人として數へらるゝに至つた。想ふに少佐が花々しき勇士の最後を遂げられたことは敢て疑ふべくもない。この一篇はかつて少佐の指導をうけた淺間乗組の少尉候補生一同の筆に成り、少佐の經歷を記せるもの、少佐の性行を寫して餘蘊なし。特に本書の最後にこの一篇を掲ぐるもの、一に少佐の名譽を表彰せんとの微意に出づ。

(編者附記)

▲招魂社

阪正臣

水漬く屍と身をも惜まず
國の爲に君の爲に
千木やかつを木靈の變ゆる
奇御魂のそのひかりは

草生す骸といのちも捐て、
盡し、いさを高くもある哉
やしるに祭られ世に仰がる、
山をも照し水をも照せり

明治三十七年九月十七日印刷

日露海戰談奥附

明治三十七年九月二十一日發行

定價金拾五錢

編輯者 木下祥真

東京市本郷區駒込西片町十番地

發行者 山縣操

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

印刷者 青木弘

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

印刷所 株式會社秀英舎第一工場



發行所

東京市本郷區駒込西片町十番地

内外出版協會

電話下谷二千四百五十三番

書圖兌發會協版出外内

版再補增

集歌軍露征

錢二冊稅郵*錢八金價定

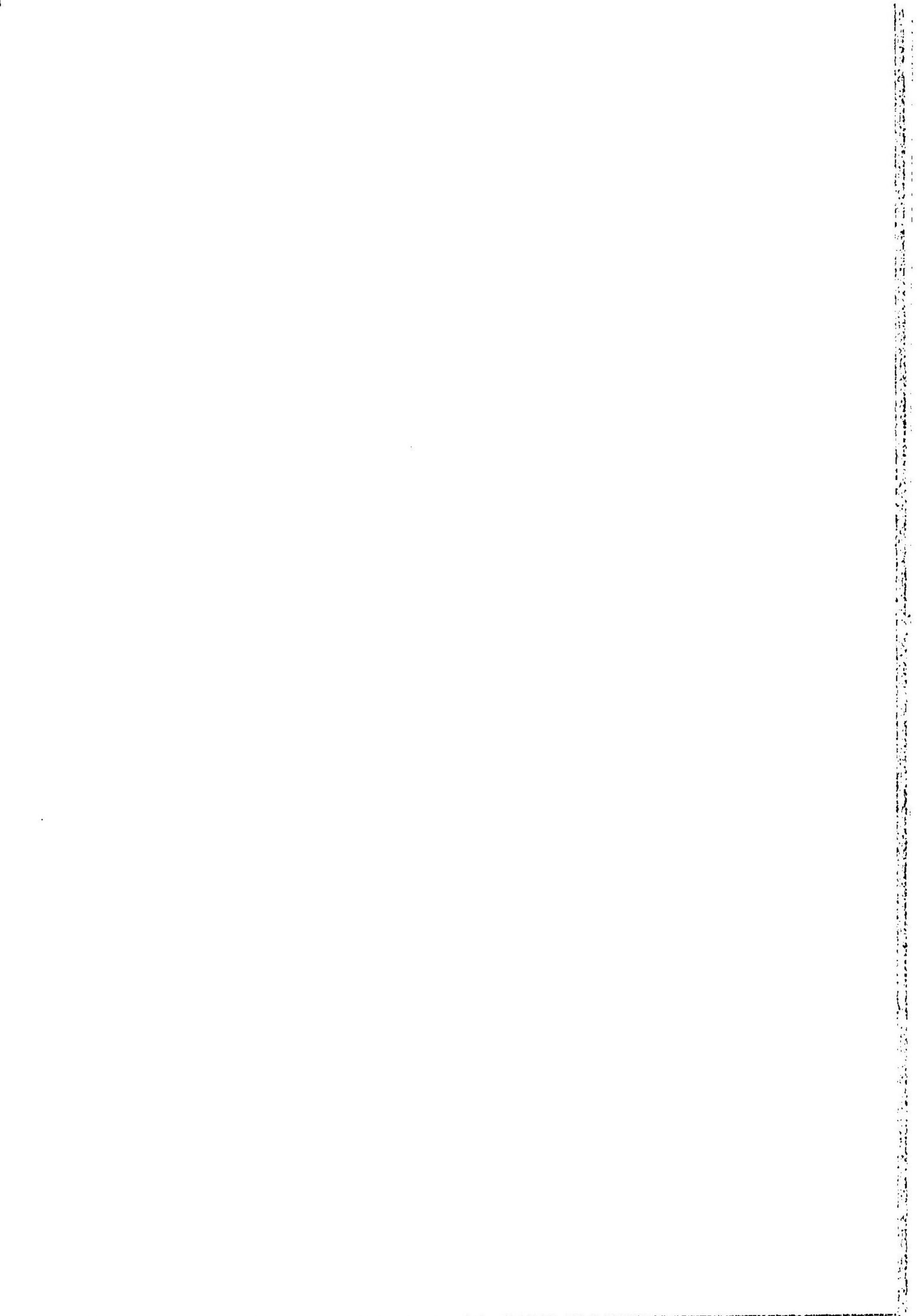
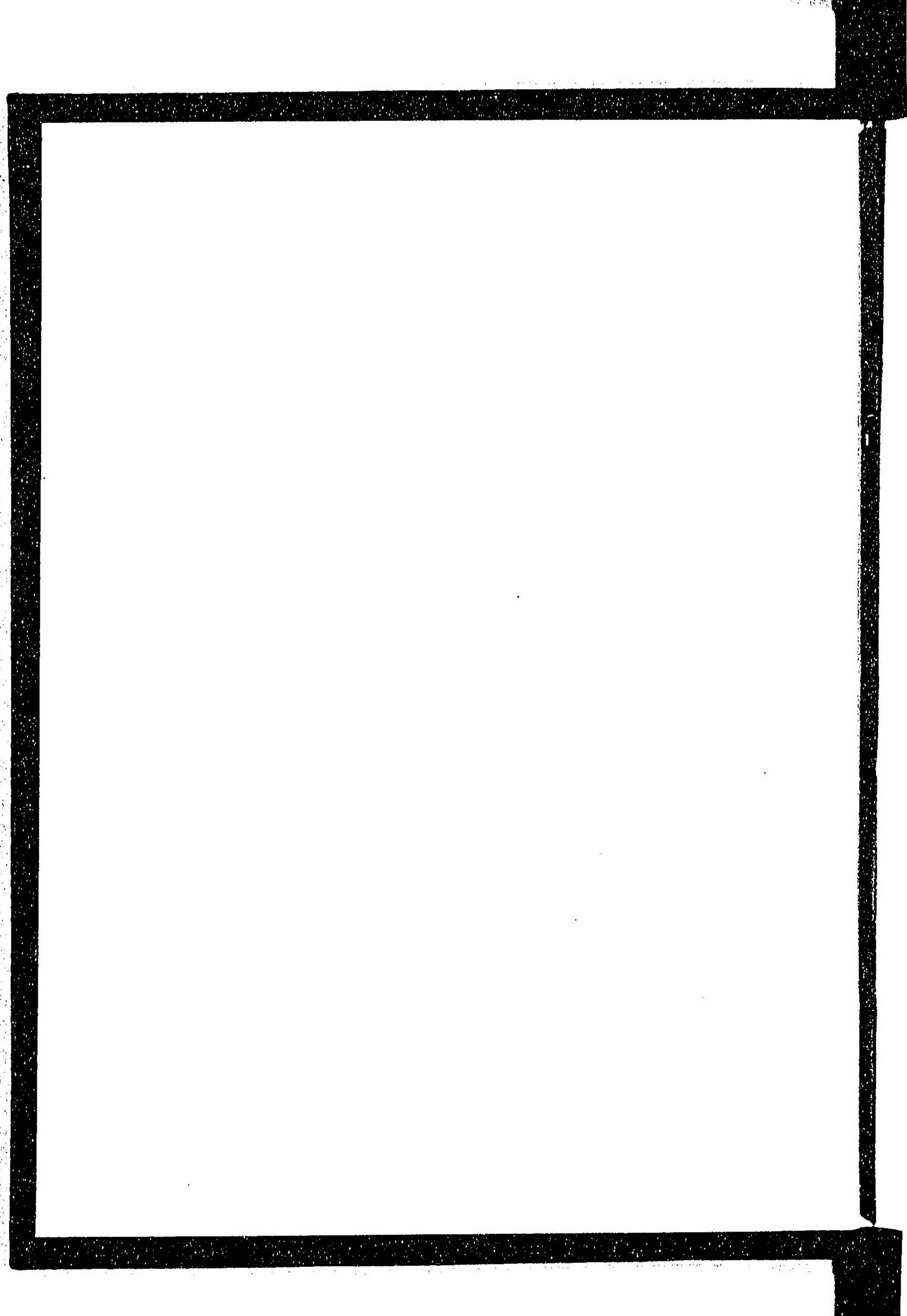
次 目

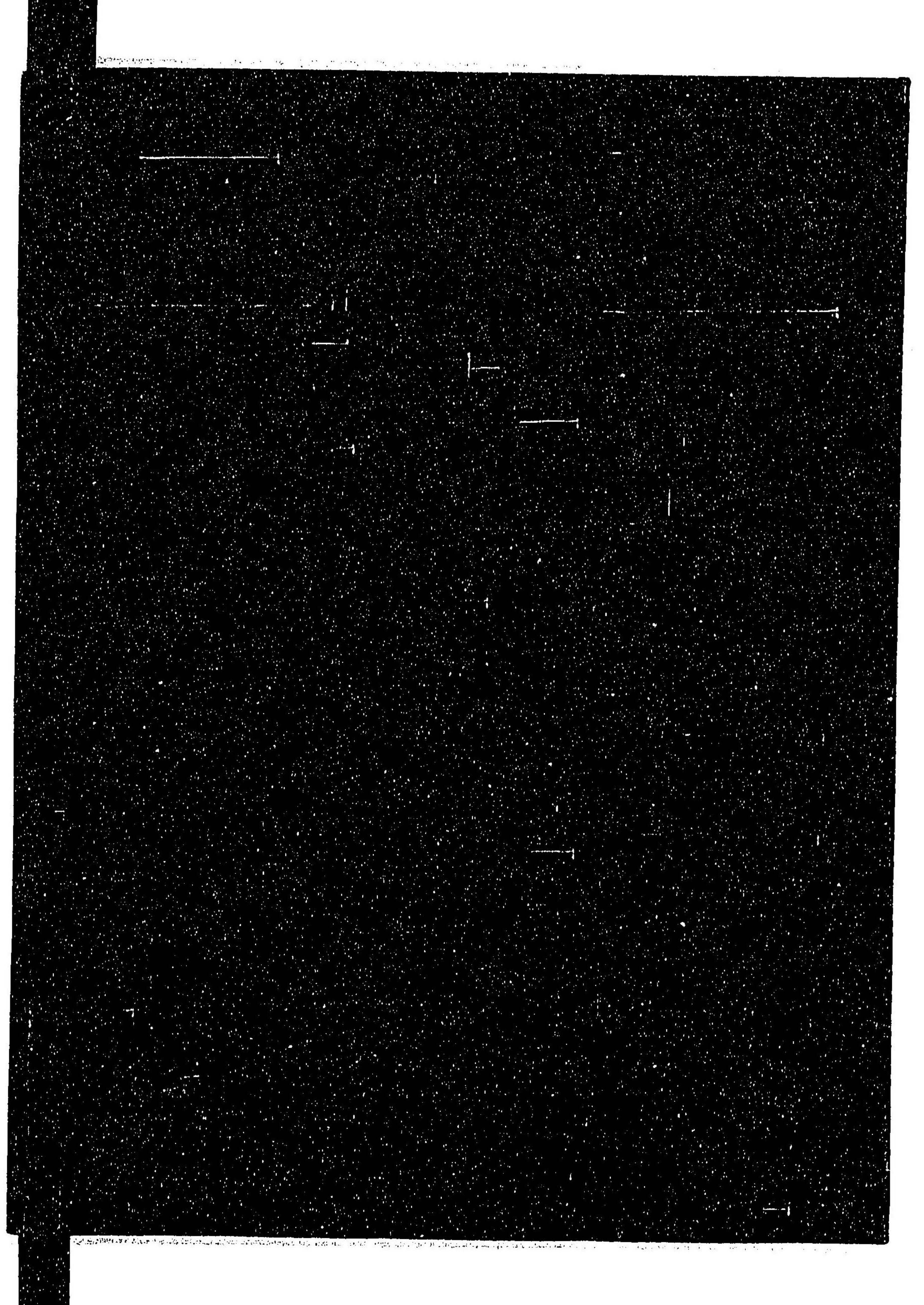
▲南	△廣	▲第	△征	▲進	△討	▲征	△祝	▲征	△征	▲討
山	瀨	二	夷	軍	露	露	捷	露	露	露
攻	中	軍	の	の	の	の	の	軍	軍	軍
擊	の	の	歌	歌	歌	歌	歌	歌	歌	歌
軍	佐	歌	歌	歌	歌	歌	歌	歌	歌	歌
歌	歌	歌	歌	歌	歌	歌	歌	歌	歌	歌
(中	(横	(森	(土	(平	(東	(明	(慶	(第	(横	(福
村	井	鷗	井	岡	京	治	應	一	井	島
覺	忠	外	晚	熙	高	大	義	高	忠	安
作)	直	作)	翠	作)	等	學	塾	等	直	正
	作)		作)		商	校)		學	作)	作)
					業			校)		
					學					
					校)					

初版五千部既に盡きたり今般增補再版發賣す袖珍五十餘頁祝

捷行列の折などの携帶用とし

て本書に優るものなし





94
313

002799-000-1

94-313

日露海戦談

木下 祥真/編

M37

ACB-6269



